

鹿児島県埋蔵文化財調査報告書（25）

大隅地区埋蔵文化財分布調査概報

1983年3月

鹿児島県教育委員会

序 文

大隅地区の埋蔵文化財包蔵地の分布調査は昭和50年度から実施しており、第8年次である昭和57年度は、鹿屋・佐多・大根占・根占の1市3町について行いました。

本報告書は本年度の調査で確認された埋蔵文化財包蔵地の外に、以前調査したもので未報告となっているものを合わせて作成しました。大隅地域における今後の文化財保護のために本書を活用していただければ幸いです。

発刊に当たり、調査に御協力いただきました関係市町教育委員会並びに関係者各位に対し深く感謝の意を表します。

昭和58年3月

鹿児島県教育委員会

教育長 井之口 恒 雄

例　　言

1. 本書は、昭和57年度に実施した大隅地域埋蔵文化財分布調査に、昭和53・54・55年度に実施した分布調査で整理の終了した遺跡分を加えて記載したものである。
2. 調査の組織は、本書の調査の経過の中で記した。
3. 遺跡、遺物の実測図、写真等は、57年度については長野真一、53年度～55年度分については中村耕治が中心となり一部を立神次郎が分担した。
4. 本書で用いた市町の遺跡の番号は任意のものである。
5. 本文の遺物番号は挿図及び図版と同一である。
6. 本書の執筆および編集は長野・中村が行った。

本 文 目 次

序 文	1
例 言	2
第 1 章 調査の経過.....	5
第 2 章 各市町の遺跡・遺物.....	6
第 1 節 佐多町の遺跡・遺物.....	6
第 2 節 大根占町の遺跡・遺物.....	14
第 3 節 根占町の遺跡・遺物.....	20
第 4 節 鹿屋市の遺跡・遺物.....	21
第 5 節 吾平町の遺跡・遺物.....	30
第 6 節 串良町の遺跡・遺物.....	37
第 7 節 高山町の遺跡・遺物.....	46
第 8 節 志布志町の遺跡・遺物.....	56

挿 図 目 次

第1図 大泊貝塚	6	第21図 吾平町内の遺物	30
第2図 大泊貝塚	7	第22図 吾平町内の遺物	31
第3図 大泊貝塚	9	第23図 宮ノ上地下式横穴群	32
第4図 大泊貝塚	10	第24図 宮ノ上地下式横穴	33
第5図 大泊貝塚	11	第25図 堀木田原地下式横穴	34
第6図 大泊貝塚	12	第26図 地下式横穴出土鉄器	35
第7図 大泊貝塚	14	第27図 串良町内の遺物	37
第8図 宿利原遺跡	15	第28図 串良町内の遺物	38
第9図 宿利原遺跡	16	第29図 吉ヶ崎遺跡、住居跡平面図	39
第10図 笑喜・宿利原遺跡	17	第30図 1号住居床面直上出土土器	40
第11図 牧原2遺跡	18	第31図 1号住居床面直上出土土器	41
第12図 大久保遺跡	19	第32図 1号住居跡覆土内出土土器	42
第13図 才原川の下遺跡	19	第33図 2号住居跡出土土器	42
第14図 赤瀬川遺跡	20	第34図 1号住居跡出土石器(石鎌)	43
第15図 野里小西遺跡	22	第35図 1号住居跡出土石器(石斧)	44
第16図 霧島ヶ丘遺跡	24	第36図 塚崎遺跡出土遺物	47
第17図 伊敷遺跡	25	第37図 塚崎遺跡出土遺物	48
第18図 小浜遺跡	27	第38図 塚崎遺跡出土遺物	49
第19図 上原遺跡出土遺物	28	第39図 上原遺跡出土遺物	50
第20図 上原遺跡出土遺物	28	第40図 下永山遺跡採集石器	51

図 版 目 次

図版 1 -① 笑喜遺跡(骨壺)	57
② 鹿屋市伊敷遺跡出土遺物	57
図版 2 鹿屋市伊敷遺跡	58
図版 3 鹿屋市伊敷遺跡	59
図版 4 -① 串良町上小牧遺跡出土土器	60
② 高山村塚崎遺跡出土土器	

第1章 調査の経過

大隅半島は、早くから多くの遺跡が知られ古代史研究の上で注目されている地域である。とりわけ、河川の発達が著しく、太平洋に流れこむ安楽川・菱田川・肝属川、串良川、また、鹿児島湾へと流れる高須川、神川、万瀬川は、その流域に肥沃な水田地帯を形成している。それらの遺物や遺跡は、古代文化を解明するうえからもきわめて重要である。しかし、このよう な貴重な遺跡も各地で行われる開発事業の影響から避けることのできない状況にある。鹿児島県では道路把握の必要性を重視し、全国遺跡分布調査の一環として、昭和50年度以降文化庁の補助を得、各市町の理解と協力のもとに大隅地域文化財調査計画に基づき分布調査を実施している。今回の調査も、その計画の一環であり昭和57年度事業として下記1市3町について分布調査を実施したものである。

調査の組織

調査主体者	鹿児島県教育委員会
調査責任者	文化課長 猪渡 侯昭
事務担当	文化課管理係長 川畠 荣造
	文化課 主査 安藤 幸次
	文化課 主事 山下 玲子
調査担当	文化課 主事 長野 真一
	文化課 主事 中島 哲郎 (現 鹿児島市教育委員会)

調査は、文化庁全国遺跡分布調査要領に基づき、埋蔵文化財を中心とした悉皆調査に加えて聞きとりによる確認や周知の遺跡の再確認も行った。

本年度は、佐多町、根占町、大根占町と鹿屋市の一部を対象とした。

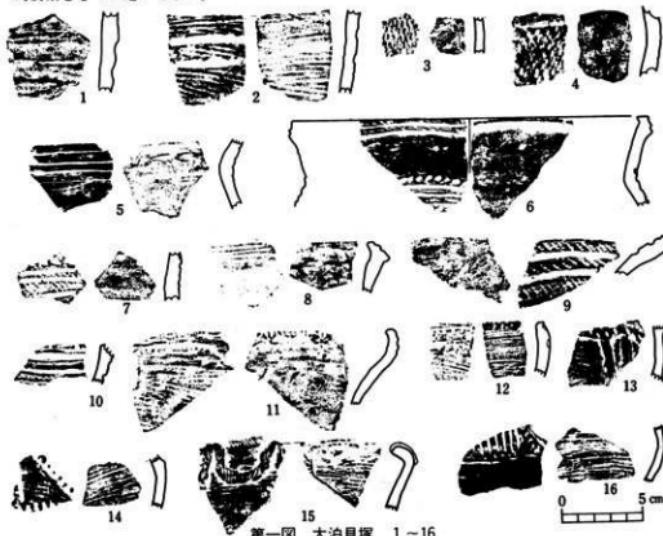
第2章 各市町の遺跡・遺物

第一節 佐多町の遺跡・遺物

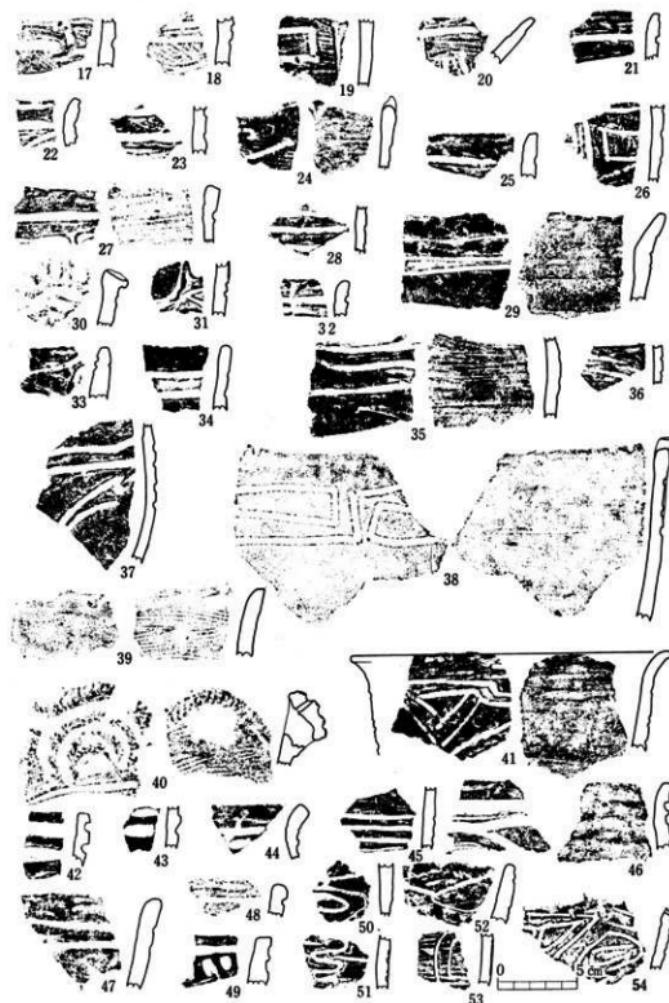
佐多町は大隅半島の最南端に位置し、東側は太平洋に面している。本町を代表する遺跡は、自然の良港大泊港の砂丘地に形成された大泊貝塚で、昭和28年、国分直一氏（現梅光女学院教授）により発掘調査され、縄文時代後期の貝塚であることが知られている。今回の分布調査の際に現状を確認したところ、地区的集団墓地造成により一部が破壊されていることがわかり、露呈した遺物を採集した。その結果貝塚を伴う遺跡地は大泊と外之浦を結ぶ県道を中心とし、南側の砂丘地、北側は集落内を越えた後背地まで広がりその面積はおよそ3～4haに達すると推定される。したがって、集落の各所で遺物の散布が認められるので、地域住民の協力が得られるよう啓蒙すると共に宅地造成等に際しては事前調査がなされるよう配慮する必要がある。

I類土器（凹線土器 1～16）

器面に施される凹線の幅が他のものより広く、1は11mm、2は7mmを測る。1は2枚貝による条痕調整の後、ナデ仕上げを行っている。2は二枚貝による条痕調整をなし一見阿高式土器の要素をもつが定かでない。



第一図 大泊貝塚 1～16



第2図 17~54 大泊貝塚

II類土器（縄文、3, 4）

単節の回転繩文を施し、3は条痕調整、4はヘラナデ調整による仕上である。

III類土器（西平式系土器、5, 8）

内外面共にヘラナデによる入念な整形が行われており、器面に光沢がある。沈線は細く鋭く描かれる。

IV類土器（磨消繩文土器、6, 7, 9, 10）

6は黒色の器面をなし、全体を入念なヘラナデ調整で仕上げている。口縁部はくの字状に外反し、回転繩文を施した後に二条の沈線を廻らし、頭部には連続刺突文が施される。7も6と同様の文様を頭部に施す。9は浅鉢ないしは皿状の器形の土器片で、口唇部に文様をつける。

V類土器（春日式系土器、キャリバー状の器形を呈する土器、11-16）

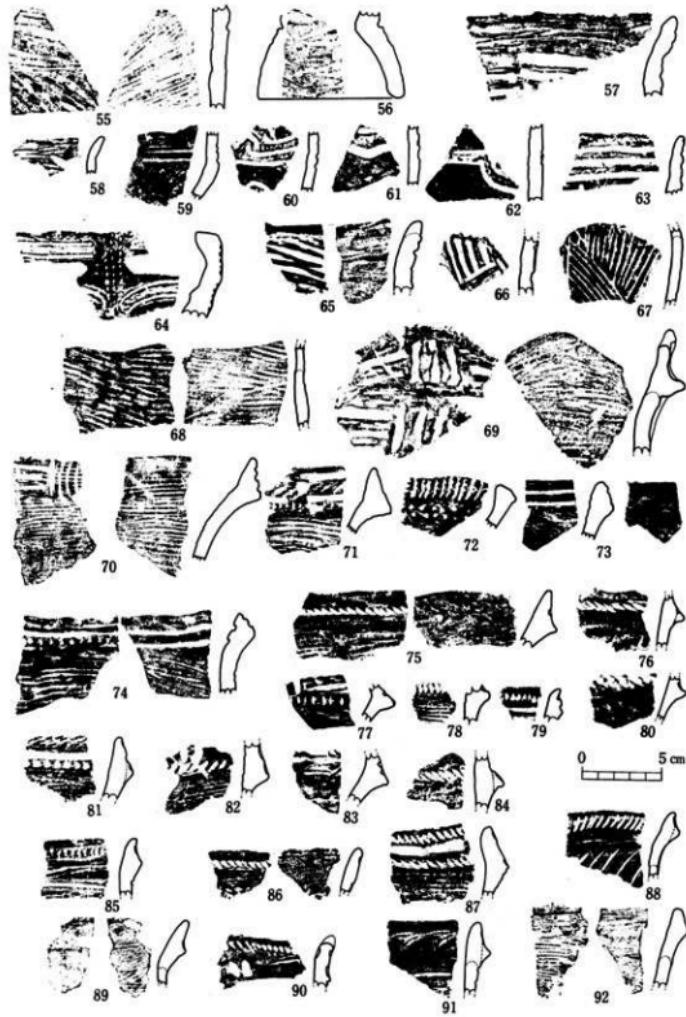
これまでに、この種の土器は鹿児島市春日町遺跡、山川町成川遺跡等に出土し、春日式土器と呼ばれ、縄文時代前期の終末に位置づけられている。この一連の土器は二枚貝による条痕調整が共通し、焼成も極めて堅緻である。特に15は口縁部に粘土ひもを貼り付け、粘土帯に繩文を回転し、磨消繩文様の文様構成のあったことがうかがえる。

VI類土器（指宿式土器、17-66, 68）

指宿市橋牛札川遺物包含地の下層出土の土器を標式とするもので、近年多くの遺跡が知られている。ヘラ状施文具による沈線文で文様を構成し、平行線文、曲線文等の組み合せが見られる。器面調整は二枚貝による条痕調整（18, 19等）、ヘラナデ調整（29, 41の内面）、条痕調整の後の指頭によるナデ仕上げ（34, 37等）等が行われる。ここで注目したい点は、ここの指宿式土器の大半が、指宿地方から直接運び込まれたのではないかと思われることである。指宿地方で採集される指宿式土器は独特的の特徴を備えており、その特徴は、同地方で採集される古墳時代の土器まで引きつがれている。まず、さわめて堅緻であること、胎土に多くの砂粒を含み石英、長石等が多く観察され、色調は明るい肌色を呈している。今回採集した指宿式土器も橋牛札川遺跡、成川遺跡、大渡遺跡等の土器と同様の特色がみられる。このことにより指宿方面より、大泊貝塚に製品として運び込まれたものと考えられる。60, 61は二本の平行沈線文間に、貝殻刺突の擬似繩文を施す。64は把手と考えられ、二枚貝による条痕調整の後、指頭によるナデ整形が行われ、光沢のある器面をなしている。文様は平行沈線文と連続刺突文である。文様構成よりVII類土器に含める。

VII類土器（沈線文土器、67）

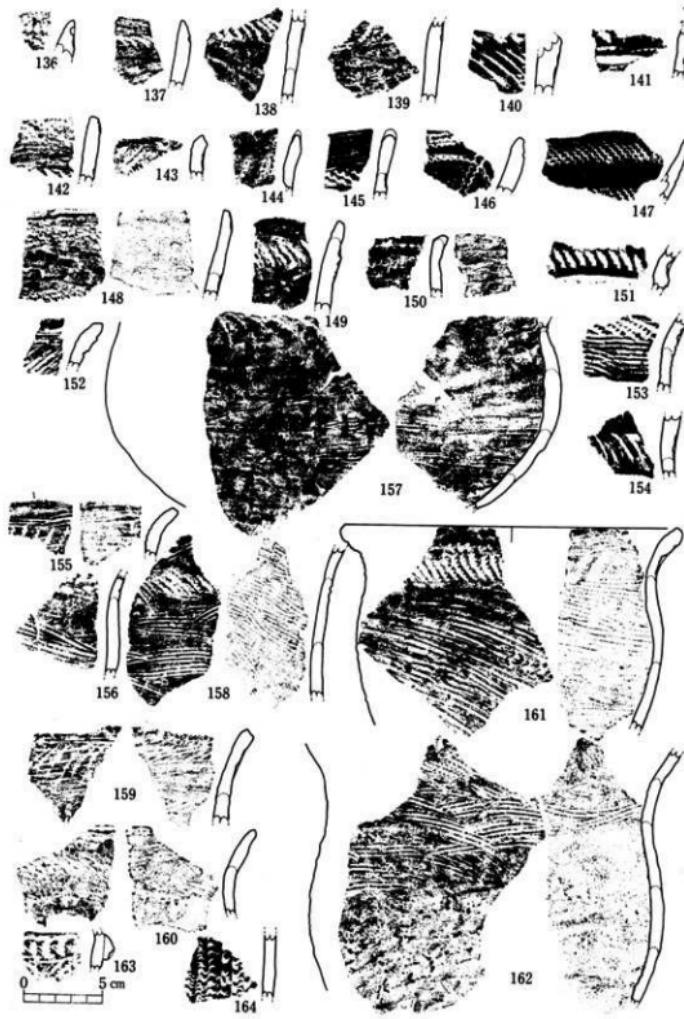
昭和55年、上屋久町一湊松山遺跡の調査により発見された土器形式で、「器形は深鉢で、胴部が張り、口縁部で外反する。底部は平底である。口縁部は断面が厚い三角形を呈し、上面または外面に文様を施す。文様は狭い文様帶に限られ、胴部に及ぶものは少ない。口縁は平縁と波状口縁があり……」と形式設定されたものである。さらに口縁部の特徴により数類に分類されている。70, 71, 77, 78, 81はA₁類、73はA₂類、72, 74はB類、73はA₁類等に、本採集品を分類することができる。70は内外面共に、二枚貝による貝殻条痕調整を行ない、口縁部は内外面



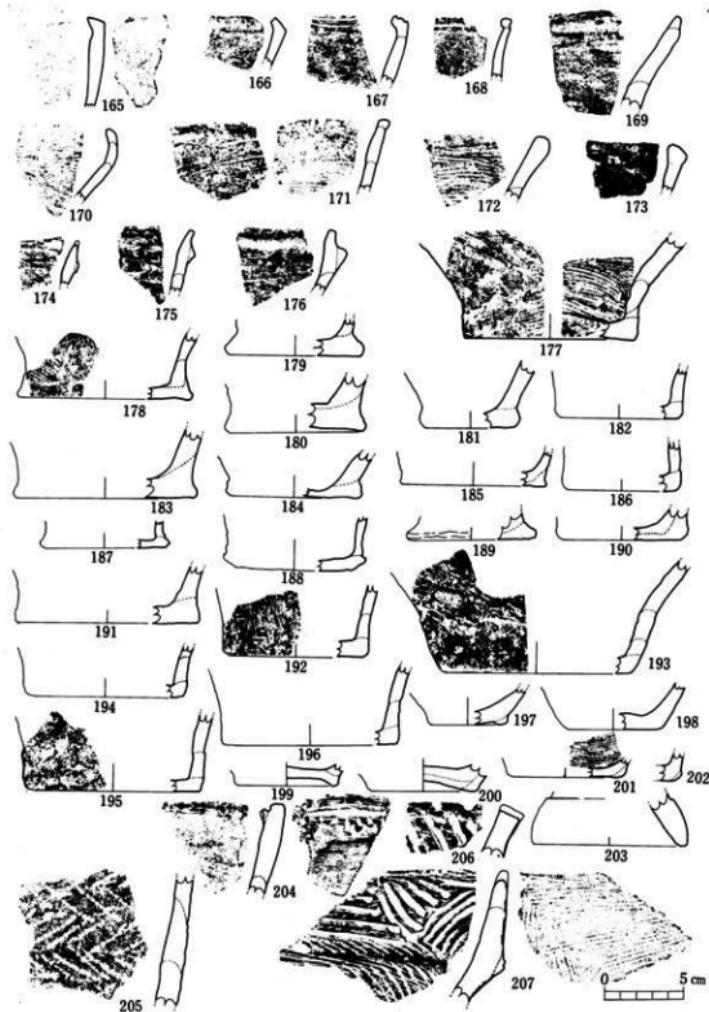
第3図 55~92 大泊貝塚



第4図 93~135 大泊貝塚



第5図 136~162 大泊貝塚



第6図 163-207 大泊貝塚

共に再度ナデによる仕上げを行なっている。文様は貝殻腹縫による縱位の押引文、三本の横位の沈線文（沈線の端部は強い刺突点）中央の沈線には連続の刺突があり、押引文と沈線文を区画する一本の縦位の沈線文が施される。又、注目されることは、土器の胎土、焼成、色調が、一澤松山遺跡出土の土器と極めて類似していることである。

IX類土器（市来式土器A類、75, 76, 79, 80, 82~92, 105, 111, 112）

口縁部が三角形に肥厚した土器群で、市来式土器と呼ばれるものである。76, 79, 82, 84, 86, 87, 90, 105, 110は肥厚した口縁部の文様帶に浅い凹線を廻らしてその上下に爪形状の連続刺突文を施す。このタイプは、笠利町宇宿貝塚にも出土している。75, 80, 83, 88, 89, 91, 92, 111, 112, 116は三角に肥厚した文様帶の幅の狭いもので、Ⅷ類土器に近い形態である。75, 86は肥厚した口縁部に爪形状の連続刺突文を、88は同様な手法による斜位の沈線文を口縁と胴部にもつ。85, 91は胴部に平行線文と口縁部に貝殻腹縫による押圧文を施す。

X類土器（市来式土器B類、69, 93~104, 106~109, 114~117, 119, 120, 125~127, 129, 134, 174~176, 227）

口縁部形態が「く」字形の断面を示すもので93, 106等がその特徴をよく現わしている。近年口縁部文様帶がく字形に広く間のびしたものには市来式の中で新しいものとされる。ほとんどが二枚貝による条痕調整で、貝殻腹縫による連続押圧文が三角突起部を込んで施される。

XI類土器（草野式土器、121~125, 128, 130~132, 134~162, 169, 171, 172）

草野式土器は、128, 161等に代表されるものでX類の特徴である口縁部が肥厚することはなくなる。文様は貝殻腹縫による押圧文と沈線文が主となる。器面調整は荒く二枚貝による貝殻条痕調整がほとんどで、157のように貝殻条痕調整後にナデ仕上げを行なった例も認められる。

XII類土器（実蒂文土器、163）

協和式土器と呼ばれるものに類似している。1点だけの採集である。

XIII類土器（164）

貝殻腹縫を押し引きした文様を持つもので、型式不明。

XIV類土器（内面に文様をもつ、204）

外面はヘラナテ調整の後、ナデ仕上げ、内面はていねいなヘラ調整が行なわれる。内面に小突起をもち、突起には1個の刺突、突起を中心に横位の沈線文、沈線文の下位に連続する刺突文を施す土器で、焼成は繩文後期の土器（指宿式を除く）に類似している。

XV類土器（205）

貝殻腹縫部で鋸歯文状に連続して刺突するもので、西之表市大割峯遺跡のII c類土器に類似するものである。⁽²¹⁵⁾ 又、九州概貫自動車道の小山遺跡でも完成品1点が出土し、石坂式系土器（繩文時代早期）として報告されているが、現時点では若干疑問が残る。今回報告の鹿屋市霧島ヶ丘遺跡でも同類のものが見られる。

無文土器（165~176）

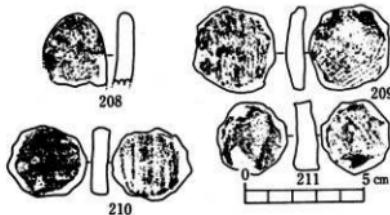
169, 171はIV類、172はXI類、174, 175はX類、176はIX類、173はVII類に帰属すると思われる。170はV類に相当する。その他は移入土器であり、且、IV類に相当すると思われる。

底部 (177~203)

199, 200はIII類相当、他は在来系で他の類のものである。

土製加工品 (メンコ, 208~209)

いづれも土器片を再利用したもので、208は口縁部をそのまま利用している。その他の3例は周囲を削り取り、円盤に造り出している。



第7図 大泊貝塚 208~211

第2節 大根占町の遺跡、遺物

本町は、鹿屋市、吾平町、根占町と境を接し、錦江湾に面した風光明媚な地勢を有している。町内を流れる神ノ川が段丘を形成し、各時代の遺跡25ヶ所が流域に所在している。

皆倉遺跡は、鹿屋市との境界にあり鈴野神社遺跡と密接な関係をもっている。この両遺跡では大量の出土品が見られ、町内でも規模の大きい古墳時代の遺跡と考えられる。また有村遺跡も古墳時代の遺跡があり、水田に取り残された小丘陵に大量の遺物散布が認められる。この遺跡地は、現在の集落内にあり今後の保護のための策を必要とすると思われる。

遺跡の形成上注目されるのは、皆倉遺跡から、中馬場遺跡、○○遺跡、坂ノ上I遺跡、坂ノ上II遺跡と連続して連なる古墳時代の遺跡地であり、それらの遺跡地は共通して錦江湾に面した高台に立地する条件を備えている。このことは、鹿屋市南部の小浜遺跡、平原遺跡、平原上遺跡でも同様であり、当時の社会を考える上で重要な要因と思われる。

町内のはば中央部、標高200~230mの高台には縄文時代の遺跡が多く発達し、特に宿利原小中学校の周辺からは多くの遺物が採集される。特に、縄文時代後期の指宿式土器を出す遺跡が多く、今後、遺跡の数、遺跡の面積も増加するものと思われる。

根占町寄りの水田地帯で、砂丘地の内側では、弥生時代中期の祭壇遺跡として知られる山之口遺跡⁽²¹⁷⁾があり、現在は、発掘調査の記念碑が立てられている。また、山之口遺跡の南側の傾地長谷では、黒曜石の産地も発見でき、石材の産地として今後の交易研究に貴重な資料と言える。

宿利原遺跡 (第8~10図) 212~229, 231, 232

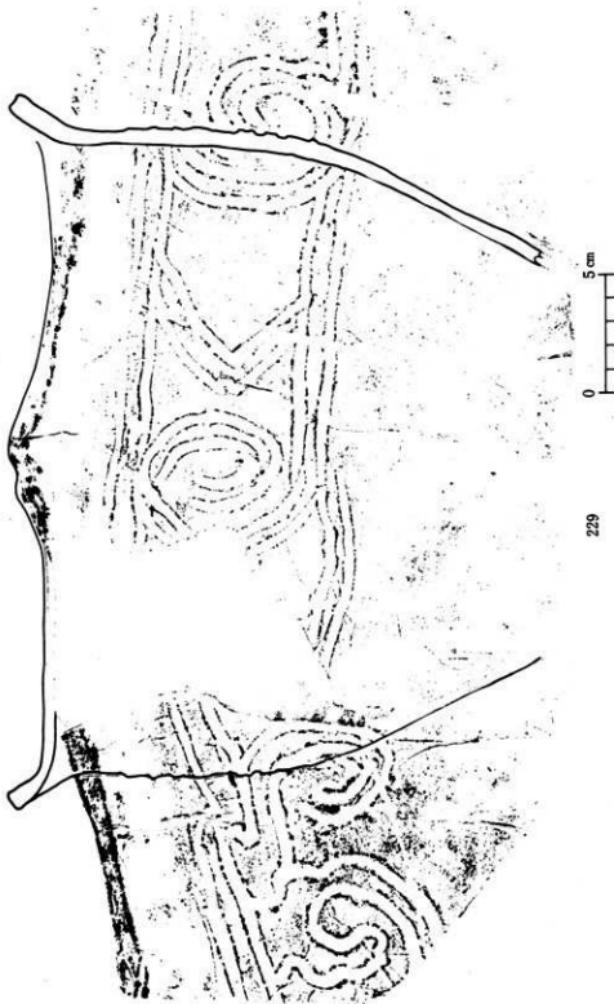
今日の宿利原集落が遺跡地であり、小学校、中学校の造成の折も遺物の出土することが知られていた。附近は、大丘陵の連続して連なる一帯で、畑地として利用され、サツマ芋、タバコ等の生産地である。

出土品は、指宿式土器を主体とした縄文時代後期のもので、一部は宿利原小学校に保管されている。

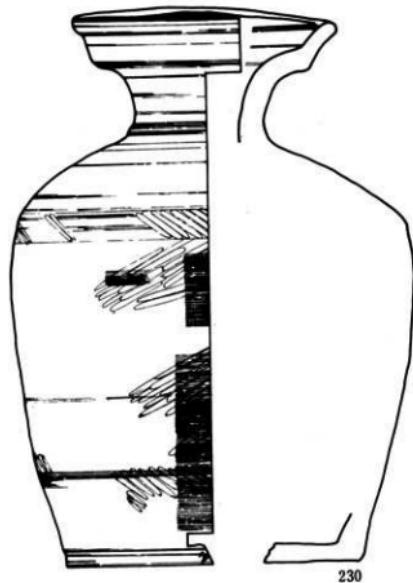
212~219等は、ヘラ状工具によりやや太めの凹線文様を描くもので、直線による平行線、曲線による平行線等が施される。220, 226等は鋭いヘラ状の工具が用いられ、文様も鋭く、226



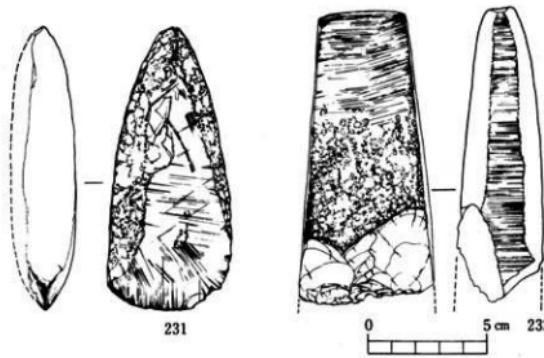
第8図 212-228 宿利原遺跡



第9図 宿利原遺跡



230



第10図 230~232 笑喜(230)宿利原遺跡 231・232

等は入念な沈線文様が施されている。226は、口唇部にも一本の沈線が描かれ、突起が付けられ中央部は窪み8個の刺突点がみられる。221, 228は、指宿式土器文化の中にみられる擬似縄文土器で、基本的に二本の平行して施される沈線(四線)の間に、貝殻刺突文により磨消縄文風に施されるものである。225は網代の圧痕をもつもので1対3の削で彫り込まれている。229は、頭部より口縁にかけて「く」の字状に外反する鉢形土器で、口縁部に4個の山形突起をもち口唇部は外開きとなる。文様は平行して横走る上下2本の沈線文とそれら沈線文間に「く」の字状のうす巻き文とで構成している。231, 232は採集した石斧で、これまでの縄文時代後期の土器片に共伴するものと思われる。2点とも硬質砂岩製で敲打技法により整形した後、部分的に磨製したものである。

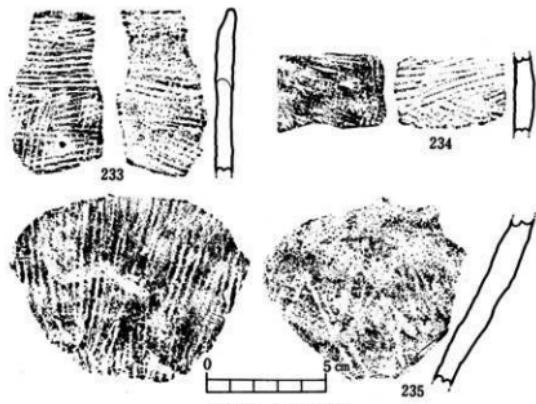
瓶(骨壺) 230

宿利原中学校に保管されていた資料で、中学生が採集したものである。笑喜の谷間とのことであるがその出土地を明確にすることはできなかった。口径11.0cm、高さ23.5cmの赤色の須恵器で、平行線叩きで整形し、ナデ消している。この形態は肥後の須恵器編表の第Ⅶ様式に相当するもので、九世紀頃、平安時代初期のものと思われる。

牧原2遺跡(第11図、233-235)

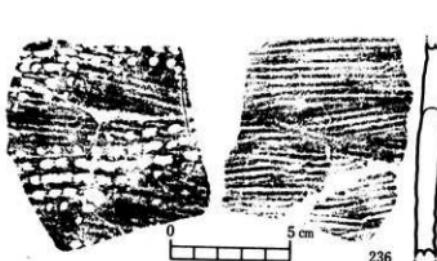
宿利原の西方、宿利原と高地を結ぶ道路を抜んだ一帯の畑地で縄文時代後期の遺跡である。233は、内外面ともに貝殻条痕の著しいもので、外面の条痕は、口縁部付近では横、それ以下では縱、横に不規則に施されている。焼成は堅緻である。235は底部に近い部分の破片で内面は風化が激しく観察は困難である。外面は縦位の貝殻条痕が著しい。胎土は多くの砂粒を含みザラザラしている。これらの他に叩石等も採集している。この遺跡は、露頭観察のできる所

であり、火山炭と遺物の相関関係の分かる所でもある。



第11図 牧原2遺跡

大久保遺跡（第12図）236



第12図 大久保遺跡

川採集の238等に類似し、縄文時代早期の遺物と思われる。

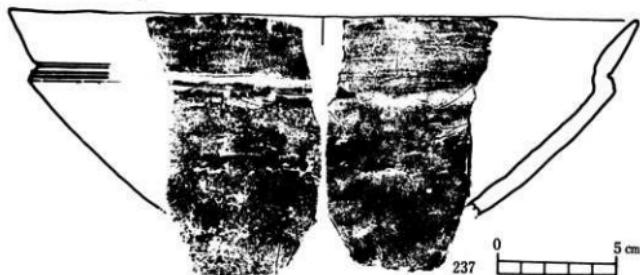
宿利原集落より牧原2

遺跡を経て大久保へ入る
新設の道路壁面より採集
したもので、アカホヤ火
山灰よりも下位の粘質土
層に含まれていた。

内面は貝殻条痕が見
られ、外側は、貝殻条痕
整形の後、貝殻による
押引き文が施されている
後に紹介する根古町赤瀬

才原川の下遺跡（第13図）237

口径26.5cmの浅鉢形土器で、頭部に二条の沈線を巡らしている。器面調整はヘラの横ナデ技
法がみられ、光沢のある仕上がりとなっている。この遺物の他、打製の不定形石器も採集され
ている。



第13図 才原川の下遺跡

註1. 国分義一「鹿児島県肝属郡佐多町大泊道路」日本考古学年報6 日本考古学会編纂 1963年

2. 河口吉雄「鹿児島市春日町道路発掘調査報告」鹿児島県考古学会紀要第4号 鹿児島県考古学会編 1955年

3. 昭和53.56年度に成田バスターミナルに伴ない県教委で発掘調査を実施し、現在報告書の作成中である。

4. 出口信、猪俣正幸「上屋久町理文化財発掘調査報告書」上屋久町教育委員会 1981年

5. 新東晃一、立神次郎「下剣峯道路」西之表市埋蔵文化財発掘調査報告書 西之表市教育委員会 1978年

第3節 根占町の遺跡・遺物

根占町では、24ヶ所の遺跡が確認できている。町内では、国見城を始めとし、富田城、山田城等の中世から近世にかけての史跡が多く、板碑等も散見できる。国見城は、大根占町との境界をなし、溶結凝灰岩が浸食されて取り残された懸崖の地にあり、錦江湾を界して薩摩半島を一望する要害の地をなしている。城内には、土壘や空堀も残っており、さらに、古墳時代の遺物も散布している。花之木A遺跡では、露頭に土塗が観察でき、花之木遺跡へ連結するものと思われるが、雜草や木立のため詳細は範囲がつかめていない。富田城跡は、現在シラスの採掘事業が進み本丸跡のみをとどめているだけで本來の姿は全く失われている。また、本丸跡の下層には縄文時代・古墳時代の文化層があるものと思われる。八重遺跡は、南・東向の小丘陵に立地した縄文時代後期の遺跡で、林道改修工事に伴って出土し、道路面や壁面に遺物が現われている。柿迫遺跡は、縄文時代と古墳時代の遺物の散布が認められる。古墳時代の遺跡はみかん園になっている。また、この柿迫集落では古くより遺物が大量に出土することが語り伝えられているが、数回の踏査、聞き取り調査のかいもなくその所在を確認するにいたらなかった。赤瀬川遺跡は、縄文時代早期の遺物を出土している。赤瀬川は、町内唯一の河川である雄川の一支流で、多くの段丘を形成し遺跡立地の好条件の地勢をなしている。今回の調査では、明確に確認できたのは1ヶ所だけであったが、今後、流域添いに遺跡が発見されるものと思われる。町遺跡は、町役場内の敷地内にあり、古墳時代の遺物が採集できる。雄川の下流域で、はんらん原であることから古墳時代以降の遺跡が密集しているものと思われる場所が、町内で最も人が集った中心地となっており、詳細な情報を提供するにいたっていない。また、今回は町南部（辺田・立神・塩屋・登尾・炭屋・石走等）の一帯は、地勢等を考慮し確認が困難と思われたので実施の対象外とした。



第14図 赤瀬川遺跡出土土器

赤瀬川遺跡（第14図238～239）

赤瀬川の段丘より形成された遺跡で、シラス取りの行われた畑地に散布している。238は、貝殻腹縁による刺突文様をもつ口縁部で、わずかではあるが内向を示す。砂粉を多く含む胎土である。239も施文具は貝殻で押し引き文をもつ。238に比べて焼成はかなりよくなり器面は光沢をもっている。

第4節 鹿屋市の遺跡・遺物

鹿屋市の分布調査は、昭和54年⁽¹⁹⁾・56年に⁽²⁰⁾2回実施し、今年度は3年次の調査である。

市内の遺跡は、これまで2年間の調査で62ヵ所知られ、今回の調査でさらに21ヵ所を追加し、83になる。

これまでに知られた遺跡を概観するといいくつかの遺跡形成の傾向・特長をみることができる。まず市内の中央部を南北に流れる肝属川のつくりだした段丘・丘陵上に連なる遺跡群では、肝属川の左側（西側）に広大な面積をもつ遺跡が形成されている。王子遺跡25・堀之牧遺跡群60、石仏道遺跡62、大窓遺跡63、上植原遺跡64等がそれであり、弥生時代から古墳時代にかけての遺物を採集できる。これらの遺跡は、現在、発掘調査が続けられ弥生時代の住居址が次第に解明されている王子遺跡と類似した様相をもつものと思われる。なお、曾田遺跡67から川東遺跡70・71・72を経て、東田ノ上遺跡22にかけても同様な背景をもつ遺跡が点在している。第2にこの肝属川遺跡群と類似した内容をもつ遺跡群が市内の南部域に広がっている。遺跡の分布する一帯は、東西に流れる大姶良川によって形成された段丘が発達する地域で、遺跡もこれらの段丘を利用してつくられている。板隅町・南町・獅子目町・田瀬町・大姶良町に数多く密集がみられる。これらの遺跡では、縄文時代、弥生時代、古墳時代、歴史時代の全時代に生活の舞台となり重複する遺跡が多く、安定した自然条件が遺跡の形成に役立ったものと思われる。

この中で特筆すべきは、伊敷遺跡31で、1万年以前と考えられる黒褐色ローム層（BBI）の中より隆起土器が出土することであり、土器発生の問題に一石を投じている。第3は、海岸線添いに点在するもので、錦江湾を足下に見下す高台に遺跡が形成されている。小浜遺跡57・平原遺跡58・平原上遺跡59・下西原遺跡18・掛平遺跡19・枯木ヶ尾遺跡26・早川遺跡27と連続して存在している。これらは、ほぼ古墳時代の遺物を産出する遺跡であり、一遺跡の占める面積も広大で遺物の出土量も大量である。このような遺跡のあり方は、大根占町でも同様で、この種の遺跡を高地性集落とする考え方もなされている。第4は、高須川流域に形成される。また、有武町周辺では、道路側壁の露頭等に、層位別に形成の異った遺物の様相を細かく観察できる所もあり、貴重な遺跡が多く存在している。一方、下流域では、小野原町の畑地帯、上野町の水田地帯が開け、それらを利用して古墳時代の遺跡が中心に分布している。最後に、横山町から霧島ヶ丘周辺にかけて点在する遺跡で横山町周辺は、古墳時代の遺跡が広がり、畑地の側道や切り通し面に遺物が層をなし密集している状況を見る事ができる。霧島ヶ丘は、鹿屋市全域を展望できる所で、縄文時代早期の遺跡が広がっている。そのような中で3河川の果した役割は大きい。やがて氾濫原や肥沃な湿地帯も生活の場となり集落址、生産遺跡等の発見されることも考えられる。ちなみに、国道220号のバイパス工事に伴った西抜川遺跡（水田）では、歴史時代、古墳時代の遺物が完全な状態で発見され、近くでは、縄文時代後期の遺物も発見されている。また、白崎町の高付遺跡（水田）でも弥生時代から古墳時代にいたる土器が多数発見され中には完形土器もあると言われている。今後は、水田地帯に注目し遺跡の発見に努める必要があろう。

次に代表的な遺跡について紹介する。

丸岡遺跡 79

古墳時代の集落址と思われ、農道拡幅工事の時に一部が削り取られ、大量の遺物が散乱している。古墳時代の遺物（通称成川式土器）が道路面や壁面にみられ、また、住居址と思われる遺構や、溝状遺構等も確認されている。同遺跡の西側寄りの所では、製鉄址らしき遺構もあり、ふいごや鉄滓等が採集されている。平安時代と思われる土器片もみつかっている。

野里小西遺跡 74（第15図240～243）



第15図 野里小西遺跡 240～243

鹿屋市立野里小学校と自衛隊（鹿屋航空隊）との間の畠地で、近年宅地造成の進行している所である。これらの遺物も、造成のために土取りの行われた後地の壁面より採集したもので、アカホヤ火山灰層下の粘質のローム層に含まれていた。

240の形式は不明で、文様は沈線文と連点文が施される。241と243は貝殻条痕文が施された赤褐色の土器片で、石坂式土器に類似している。^(注11)244は塞之神式土器で胎土に砂粒を多く含んでいる。色調は灰褐色を呈し横走する沈線文に撲糸文を直交し文様を構成している。

註11 河口貞徳「塞之神式土器」「鹿児島考古学第6号」鹿児島県考古学会1972年

新東見一「塞之神式土器」「縄文文化の研究3—縄文土器I—」雄山閣出版株式会社1982年

この塞之神式土器は、河口貞徳が塞之神A式土器と呼ぶもので、近年、新東見一が塞之神田式土器と呼んでいるものと同一であり、縄文時代早期の遺物である。

霧島ヶ丘遺跡83（第16図 244～258）

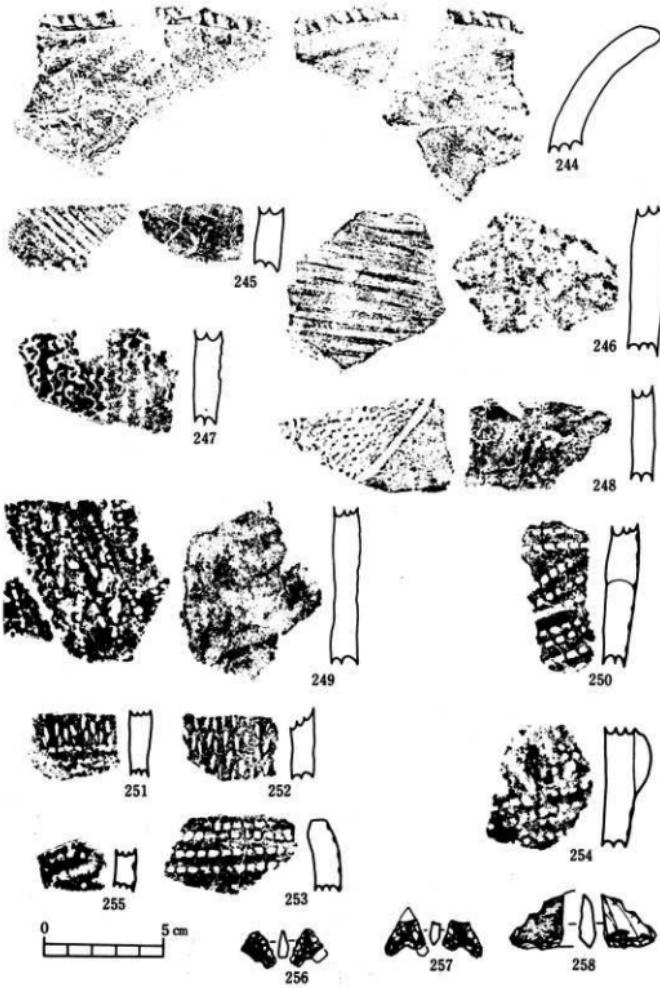
遺物を採集できるのは、現在、市の運動公園の中であり、公園造成により一部を破壊したものとみられる。この種の遺跡は、かなり広範囲に広がることも考えられる。周辺の防風林帯や畑地の下に埋れていることも推定される。244～246は、石坂式土器片で、口縁部が大きく外反し、口唇部には連続した浅い刻みが施されている。また口縁部には、二枚貝の腹縁部による刺突文が施される。247は、吉田式土器で、胎土に多量の金雲母を含んでいる。内面はナデ調整がなされている。248は、塞之神A a式土器で胎土に多くの砂粒を含み、焼成は良く赤褐色の表面を呈している。249は、西之表市下制峠遺跡のII c類と同種の土器で、貝殻刺突により崩壊状文を描いている。胎土は247の吉田式と同様金雲母を多量に含みもろくなっている。250, 253～255も貝殻刺突文土器である。特に254は瘤状突起がみられる。なお、251, 252の文様は、ヘラ状工具で刺突されたもので爪形文風の文様となっている。これら6個の破片は2個体分のものと思われる。焼成が極めて良く灰黒褐色で堅ろうである。

伊敷遺跡31（第17図 259～278）

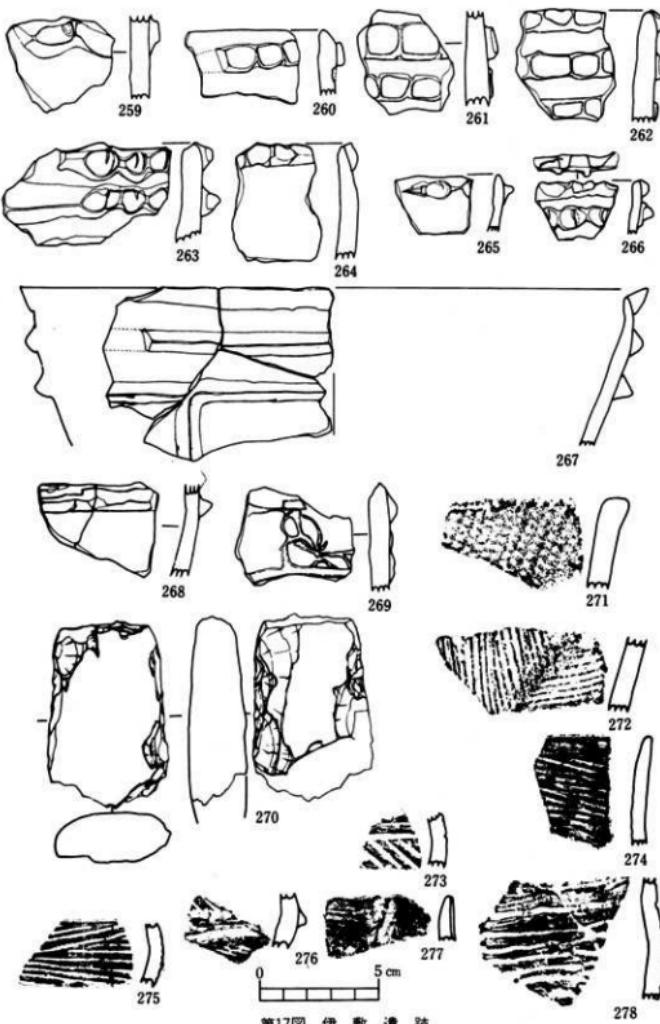
伊敷遺跡は昭和53年に確認調査が行われた遺跡で層位はI層・灰黑色土（耕作土）、II層・黒色火山灰土、III層・茶褐色土、IV層上部には部分的に紫色の膠結コラ（開闢土）が見られる。また、III層中には軽石が含まれるが、下部は軽石の量が多くなる。V層・黄色軽石、VI層・黒茶褐色粘土、VII層・赤黄褐色バミス、VIII層・乳褐色粘土質土、IX層・黒褐色土（バミスを含む）、X層・暗茶褐色粘土質土、XI層・赤褐色軽石（大隅降下軽石）が観察される。V層の軽石は池田カルデラ起源で約4600年前、VI層はアカホヤと呼ばれるもので喜界カルデラ起源で約6000年前、VII層中のバミスは桜島起源で約10,000年前、X層の軽石は姶良カルデラ起源で約20,000年以前と想定されている。遺物は、III層上部に弥生時代中期・古墳時代の成川式土器・土師式土器。IV層中部に縄文時代後期～晩期。V層に縄文時代前期（型式不明）と思われる土器片と炭化物の多く含まれた集石（疊群）が検出される。VII層より縄文時代早期の土器片と集石。IX層中に隆帶文土器、石斧が見られる。

259～270まではIX層より出土したもので、隆帶文系の土器片と思われる。^[付註]

これらの隆帶文土器は、一様に、貼り付ける隆帶（粘土紐）が大きいため、隆帶部の剥脱したものとみられる。隆帶は大きなもので約2cmであり、259～262は、隆帶の上に指頭で押しつけ四面を形成している。263～266でも同様であるが、指頭圧痕の際に爪痕も同時に押しつけられている。267と268は、三角の粘土帶の貼り付けであり、269は小さな粘土帶を貼り付けている。265と266は焼成が極めて良く灰褐色を呈し堅ろうである。他の土器片は、赤褐色でもろく剥脱が激しい。270は、泥岩を用いた石斧で風化が激しく、磨製石斧的な様相を呈しているが明らかな観察はできない。271・272は、VII層（乳褐色粘土質火山灰土）より出土したもので、石坂式土器と思われる。273～278は、V層（黒茶褐色粘土質土）より出土したもので、炭化物を多く含む集石もある。278を除いてほぼ同類の土器片と思われる。274は口縁部で、やや外反する口縁部をなす鉢形土器で、内外面ともに貝殻条痕が著しい。275は沈線の組み合せ文様をもつもの



第16図 霧島ヶ丘遺跡



第17図 伊敷遺跡

で、276・277と同一個体と思われ、沈線文と降帯の組み合わせ文様をもつものである。278も沈線文様の土器であるが、他とはやや異なり焼成もやや軟質である。これまでにこれらと同一の土器は発見されておらず型式は不明で、その帰属は明らかでないが層位的条件、土器の成形手段などより縄文時代前期に位置すると思われる。

当遺跡は、遺物の層位的な関連がよく現われており重要な遺跡である。

註12. 本県を中心として南九州に特有に見られる土器で、昭和37年河口直徳により宮崎県串間市大平遺跡で発見されたのが始まりである。その後、本遺跡を含め、瀬戸内海沿岸に分布していることは、出土する層位が約1万年以前と推定される桜島火山灰よりも下位のローム層である。このローム層は、本県では、細石器を主体とする文化層でもあり、発生期の土器として近年注目されているものである。

瀬戸内海「東黒土田遺跡」「鹿児島考古第15号」鹿児島県考古学会 1981年。

河口直徳・峯崎幸清・上田耕一「縄石橋遺跡」「鹿児島考古第16号」鹿児島県考古学会 1982年。

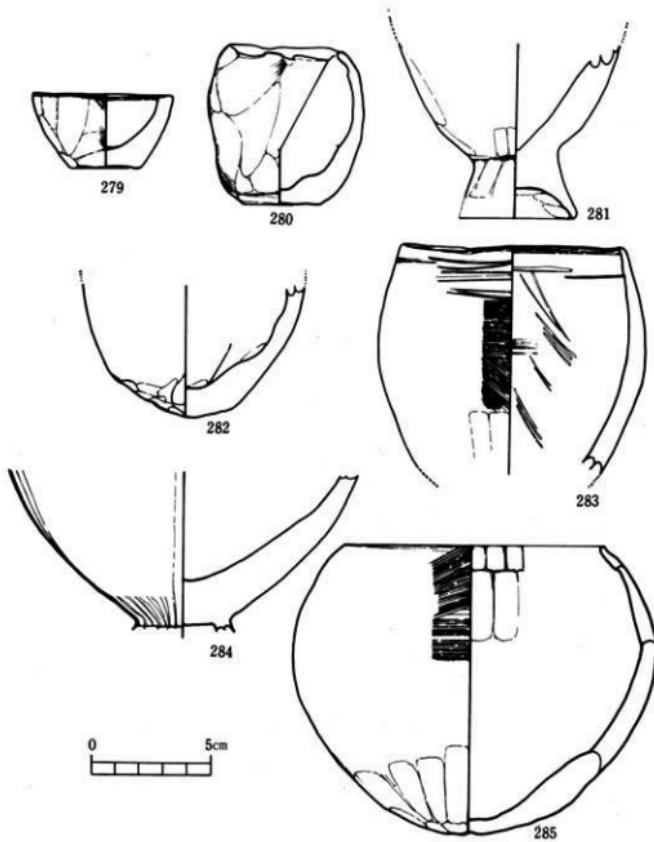
小浜遺跡（第18図）

昨年報告した浜町田小浜遺跡で採集された遺物で耕作者が所有していたものを借用して紹介した。大根占町とを結ぶ国道269号線を足下に見下す高台の畠地があり、錦江湾につき出した高台に立地している。

279は口縁径が5.9cm、高さが3.1cmを測る手捏ねの小形鉢である。口唇部は平坦面をなす。安定した平底より口縁部へ直行する厚手の土器である。内面はヘラナデ、外面には指圧痕が認められる。280は、口縁径4.8cm、高さ6.6cmの小形壺形土器でやはり手捏土器である。無頸壺で安定した平底で、口縁部に向かい内湾し口縁は狭く丸く終わっている。内外面ともにユビナデである。281、小形壺形土器で、脚台が付けられ内面はヘラナデ、外面もヘラナデである。282、小形壺形土器で、内外面ともヘラナデで、底部は丸底で凹凸がみられ整形は稚である。胴部最も張り出した部分に若干の凹みがあり貼り付け突起のつく可能性もある。283は鉢形土器で、外面の上半部はヘラの横ナデ、下半部は擬ナデ、内面は纖維状のハケナデである。胴部中央から内湾しながら口縁部へ直面にのびる器形である。284は台付の鉢形土器で、外面は擬方向のヘラナデ、内面はヘラナデで、器形はいくぶん丸味をおびて強く開きながら口縁部につづく形を呈している。脚台は、貼り付けによってつくられる。285、丸底の無頸壺形土器で、最大径が上半部にある。やや球形を呈し、最大径の部分で接合している。内面は擬方向のヘラナデ、外面はヘラナデで、底部に竹状の压痕がつく。

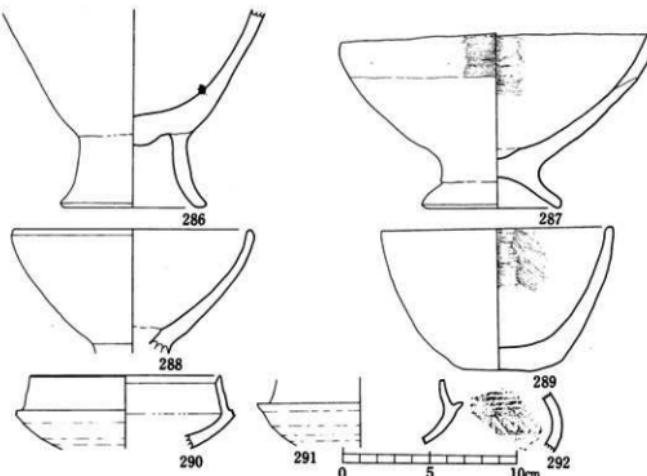
上原遺跡（第19・20図）

上原遺跡は55年度に確認調査を行なった遺跡である。古墳時代の遺物が主に出土し、住居址らしい構造も見られた。286は壺形土器であげ底の脚台を有する。287はやや浅いあげ底の脚台を有する鉢形土器である。大きく外反して立ちあがり、口縁端部は若干内湾する。外面は全面に丹と思われる赤色顔料を塗布する。288は高环の坏部と思われる。口縁部はやや内湾し、外面



第18図 小浜遺跡

は全面に汁と思われる赤色顔料を塗布する。289は鉢型土器、平底の底部から直行に近く立ちあがるものである。286～289は成川式と言われているものである。290～292は須恵器である。290は環で、口縁部はやや内傾し、端部内面に棱を有する。291は環で口縁部はやや内傾し、端部は欠損する。受け部はわずかに上方へのび、端部は既くおさめる。292は壺か甌の胴部と思われる。胴部最大径の位置に櫛描波状文を施す。

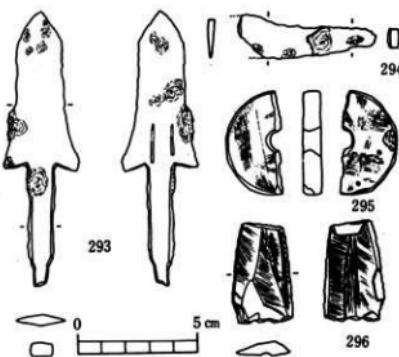


第19図 上原遺跡出土遺物

293は全長11.5cmを測る鉄鎌である。茎の断面は長方形でいわゆる平根式である。身は長三角形を呈し、峰が尖がり逆刺を有するものである。294は刀子の一部と思われる。295は筋綫車の半分と思われる石製品である。直径は4.4cm、巾0.7cmで中央に約0.8cmの穿孔を有する。296は磨製石鎌で先端部を欠損するものである。基部は推定で2.7cmを測り、二ヶ所に幅0.4cmの快り

が見られる。又片面に幅0.5~0.3cm、長さ3cmの溝を有する。

296は弥生時代の所産であろう。286~289は成川式系の土器で古墳時代のものと思われる。290~292はやや古いタイプの須恵器で、5世紀末から6世紀初め頃のものと思われる。293、294の鉄器も古墳時代に属するものと思われる。



第20図 上原遺跡出土遺物

鹿屋市

遺跡名	備考
1 本坊	古・弥・繩
2 島元	古・弥
3 上原	古・弥
4 松尾	歴・古・弥
5 園ノ前	歴・古
6 飯隅	古・弥
7 小牧	弥
8 菖蒲	古・弥
9 幕小牧	古・弥・繩
10 田渕上	古・繩
11 茶園ノ上	古・繩
12 藤崎	繩
13 漱筒原	歴・古・弥
14 小永崎	歴・古・弥
15 水崎	歴・古・弥・繩
16 山神	繩
17 諏訪尾	古・繩
18 下西原	歴・古・弥
19 掛平	歴・古・弥
20 湯穴ノ上	古・弥
21 笹ヶ尾	弥
22 東田ノ上	古・弥
23 早馬原	歴・古・弥
24 中牧	歴・弥
25 王子	歴・弥
26 枯木ヶ尾	古・弥
27 早山	古
28 保刈	古・繩
29 池ノ追	古・弥
30 銀守ヶ追	古・弥・繩
31 伊敷	弥・繩
32 芝原	古

遺跡名	備考
33 山外森	古
34 中野	古
35 神野牧	繩
36 打馬	古
37 平原古墳	古
38 大浦	繩
39 郷之原	古・繩
40 川の上	古
41 川瀬町遺跡群	古・繩
42 芝立	古・繩
43 鶴羽城跡	歴・古
44 古里	古・弥
45 キタバイ	古
46 谷平	古
47 松の岡	古
48 岡元	古
49 老神	歴
50 早馬原B	古
51 浜田小南	古
52 宮の尾	古
53 浜田	古
54 上田原	古
55 本村原	古
56 皆倉	古
57 小浜	古
58 平原	古
59 平原上	古
60 沢之牧遺跡群	古・弥
61 上抜川遺跡群	古・繩
62 石仏頭	古・弥
63 大窪	古・弥
64 上楠原	古

遺跡名	備考
65 西抜川	古・弥・繩
66 寿三丁目	古
67 曽田	古
68 勾崎	古
69 寿六丁目	古
70 川東1	古
71 川東2	古
72 川東3	古
73 高付	弥・古
74 野里小西	古
75	
76 小野原	歴・古
77	古
78	
79 丸岡	歴・古
80 横山1	古
81 横山2	古
82 横山3	古
83 霧島ヶ丘	繩

歴……歴史時代

古……古墳時代

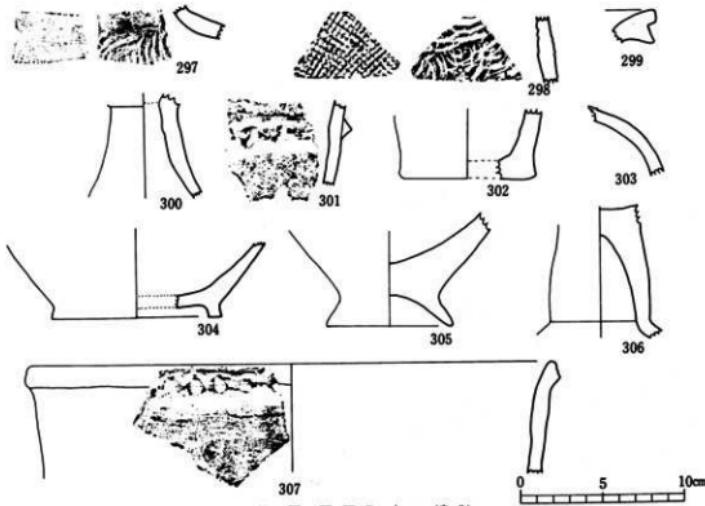
弥……弥生時代

繩……繩文時代

第5節 吾平町の遺跡・遺物（第21図～第26図）

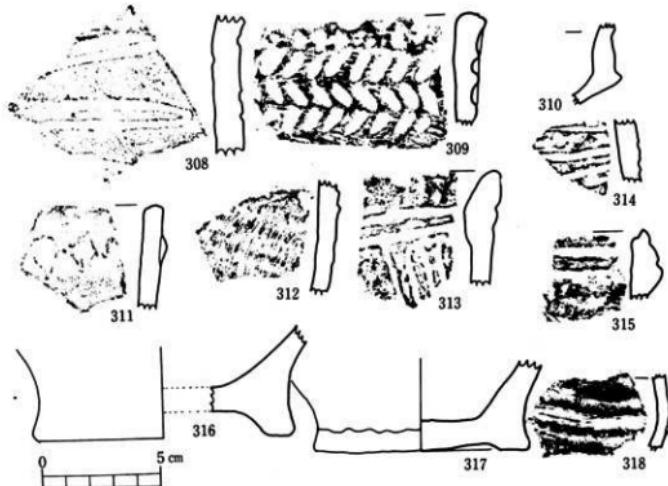
吾平町は大隅半島のほぼ中央南部に位置し、鹿屋市、串良町、高山町、田代町、大根占町と接している。南部は山岳地帯で、姶良川、吉野川、大姶良川等の源となっている。北部には火山灰台地及び沖積平野が広がり、遺跡立地の好条件を備えている。今までにも縄文時代、弥生時代、古墳時代の遺跡の他に中世山城等が多く知られている。特に、地下式横穴は天神原地下式横穴群、宮ノ上地下式横穴群等が古くから知られ調査も行われている。表の1～23は最近の分布調査により確認された遺跡、24～60は遺跡地名表より抜き出したものである。

297～299は寺ヶ迫遺跡(51)、297は須恵器で甕の肩部と思われる。298も須恵器で甕の胸部と思われる。外面は格子目印き文、内面は青海波印き文が見られる。299は弥生時代の壺の口縁部で二叉状を呈する。弥生中期と思われる。300、301はモタイ坂遺跡(36)、300は高环の脚部、301は變形土器で、刻目突帯を有する。いずれも成川式（古墳時代）と思われる。302は中尾遺跡(7)、縄文式土器の底部である。303は反田原遺跡(5)、須恵器の壺の肩部と思われる。わずかに頸部が認められる。304～306は前木場遺跡(18)、304は須恵器で高台を有する環である。305は浅めの脚台を有する甕、306は高环の脚部である。305、306は成川式（古墳時代）と思われる。307～313、316～318は西方高迫遺跡(8)、307は復元口縁径33cmを測る鉢形土器、口縁部に刻目突帯を有する。308は沈線文を施すものである。309は短い凹線を連続して施すもの



第21図 吾平町内の遺跡

ある。310は黒色研磨された浅鉢形土器である。311は口縁部下位に刻目突帯を有する。312は幕目压痕文土器である。313は口縁部で、沈線文を施す。314、315は吉野原遺跡(23)、314は沈線文を施す。315は口縁部で沈線文を施す。316、317は縄文式土器の底部である。316は高台状を呈する。318は三角角突帯を有する壺形土器で弥生中期と思われる。308、309、313～317は縄文後期。307、310～312は縄文晩期のものと思われる。

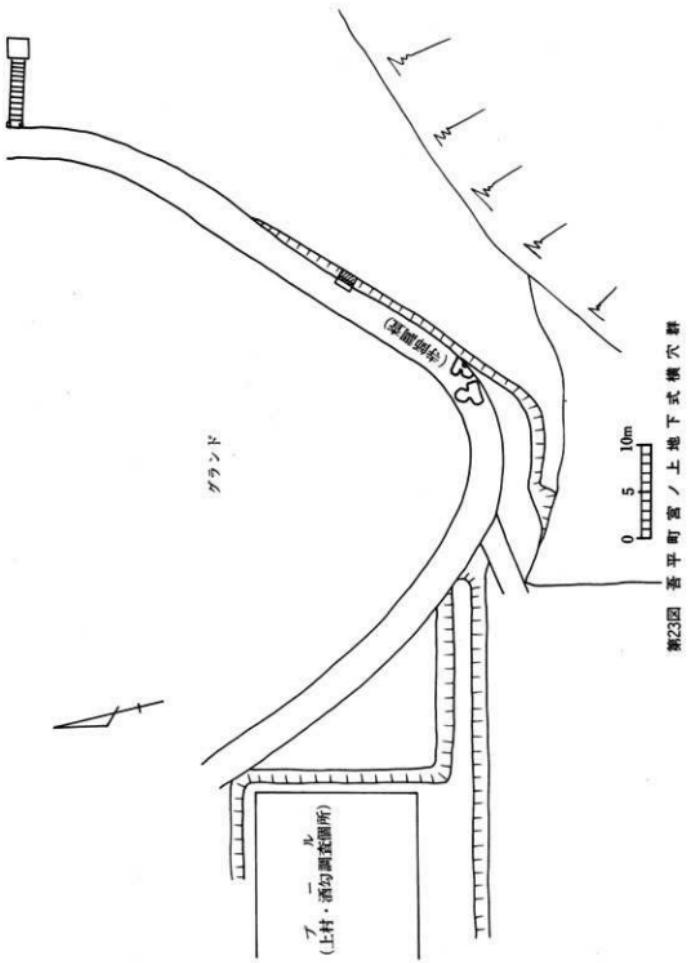


第22図 番平町内の遺物

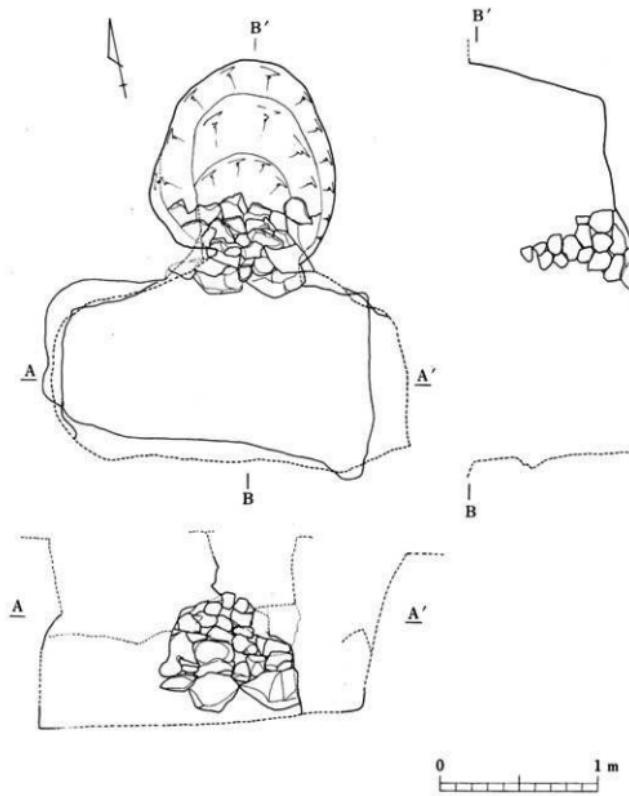
宮ノ上地下式横穴（第23図、第24図）

宮ノ上地下式横穴群は吾平小学校の校庭にあって早くからその存在が知られており、寺師見国、上村俊雄、酒匂義明等により報告されているものである。今回報告のものは昭和53年に、校庭の外周に車道を造る際に発見されたものである。玄室部は発見当時において重機等により削られて居り、形状については不明である。

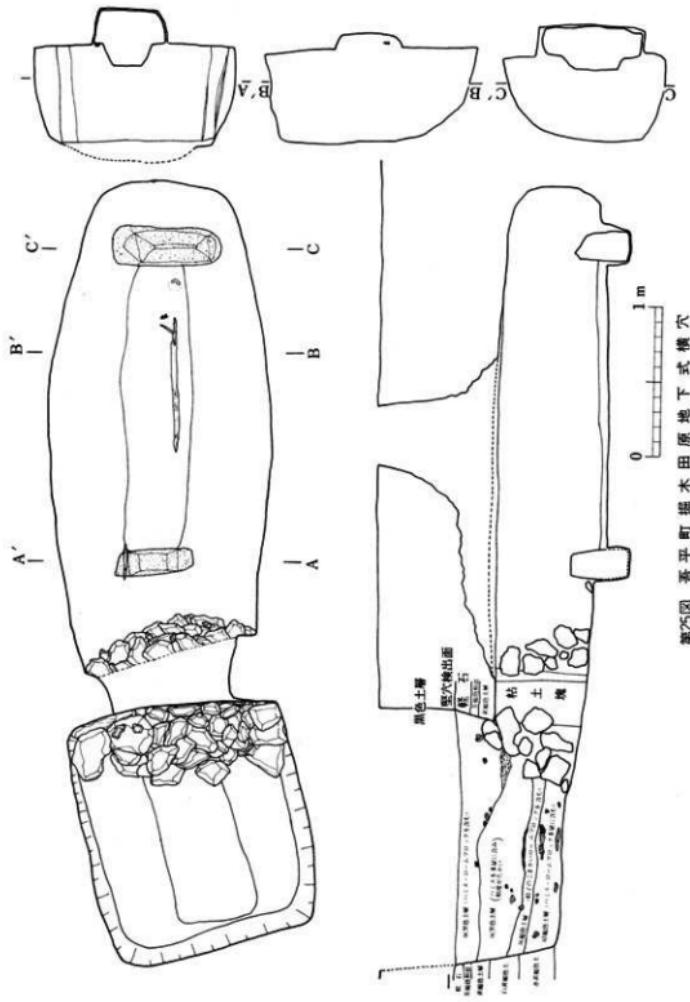
この地下式横穴は校庭の南隅にあり、上村・酒匂によって調査されたプールの位置より、約45m東側に所存する。豎穴部は北側にあり径約1.2mのほぼ円形である。羨道部は幅1m、高さは推定で1.5mを測る。玄室部の中央に取り付けてありいわゆる平入りである。玄室は発見当時にすでに焼されており、形状を明らかにすることは不可能である。復元すると平面プランが $0.9 \text{ m} \times 2.1 \text{ m}$ 、高さ0.8mのドーム状を呈していたものと思われる。出土遺物は工事中に鉄剣の破片が一点発見されている。



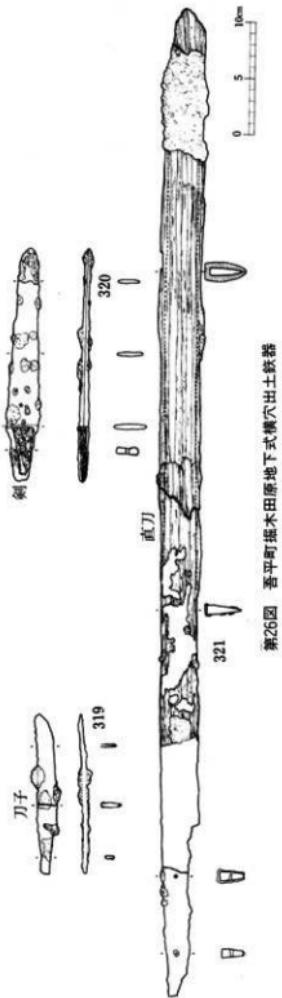
第23図 菅平町宮ノ上地下式横穴群



第24図 宮ノ上地下式横穴



第25圖 菅平町根木田原地下式横穴



掘木田原地下式横穴（第25図、第26図）

掘木田原地下式横穴は、昭和55年、耕作中に玄室の天井が陥没して発見されたものである。前述の宮ノ上地下式横穴より約1km西方の台地縁辺部に位置する。主軸はほぼ東西方向を示す。全長5.2m、竪穴部は西側に位置し、 1.5×1.6 mのはば方形、深さは検出面より0.7m(推定1.0m)。狹道部は上辺0.8m、下辺0.95m、高さ0.6mの台形状で長さ0.4mを測り、玄室への取り付けは妻入りである。狹道部の閉塞は10~30cmの大の粘土塊による。玄室は幅0.9~1.5mの若干脛張りを持つ略長方形である。高さは0.7mでアーチ状を呈する。玄室内には狹道部寄りと、奥部に一枚ずつ絆石板を配置し、それらの間に巾0.45m、長さ1.9m、深さ5cmの死床を有する。人骨は頭骨と歯が残存しており、その状態から頭部は玄室の奥部で東に向いていたと思われる。副葬品は直刀、剣、刀子が各1点づつ発見されている。319は刀子で、全長14.4cm、茎部は長さ3.5cm、幅0.5~1.2cm、厚さ0.3cm、刃渡り10.9cmで刃区を有し、幅1.6cm、背の厚さは0.4cmを測る。320は剣で全長21cm、茎部は長さ5cm、幅1.5~3cm、厚さ0.5cmを測る。目釘穴1個を有し、木柄の残痕が見られる。刃部は16cm、幅1.4~3cm、厚さ0.3~0.5cmを測る。321は直刀で全長89cm、茎部は長さ15.5cm、幅0.8~2.7cm、厚さは背部で0.6~0.9cm、刃部側で0.4cmを測り、目釘穴2個を有する。刃渡り73.5cm、刃区を有し、幅3~3.4cm、背の厚さ0.8cmを測る。鞘と思われる木質の残りが良好である。

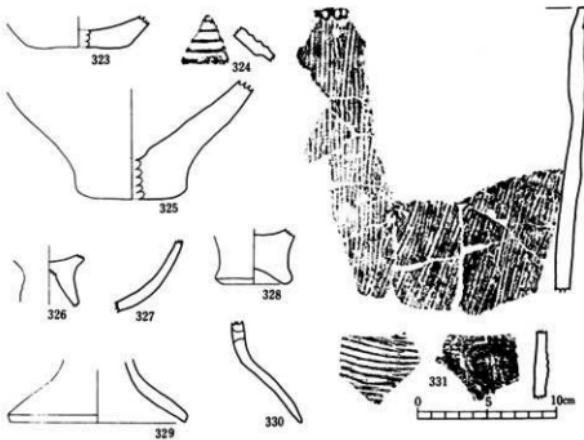
この地下式横穴は鹿児島県内では最大級の規模であり形態も長方形、妻入りで、死床を有している事などから古いタイプのものと考えられる。5世紀末から6世紀初頭の時期が想定される。

番号	道跡名	所在地	備考	番号	道跡名	所在地	備考
1	井牛田原	鹿井牛田原	弥生	33	鶴戸神社脇	鹿鶴戸神社脇	弥生
2	論 地 論 地	地	繩文・弥生	34	千寿院坂	鹿千寿院坂	"
3	霧島原	霧島原	弥生	35	大车礼	西目路大车礼	"
4	三角原	〃 三角原	弥生	36	モタイ坂	上名モタイ坂	"
5	反田原	〃 反田原	弥生	37	西 追	鹿 西 追	"
6	境 原	〃 境 原	弥生	38	赤野原	〃 赤野原	"
7	中 尾	上名中尾	弥生・土師・須恵	39	鶴川内	〃 鶴川内	"
8	四方高追	上名四方高追	繩文・弥生・土師・須恵	40	池 山	下名論地池山	"
9	水 流	〃 水 流	繩文	41	井 神 島	下名井神島	"
10	平ヶ堀	〃 平ヶ堀	繩文	42	諏 訪 尾	上名訪諏尾	"
11	名 主 原	〃 名 主 原	弥生	43	角 野 原	上名角野原	"
12	鶯 原	鶯 原	弥生	44	下 名	下名学校隣	"
13	出水田原	〃 出水田原	弥生	45	鏡 原 上	上名鏡原上	"
14	堀木田原	〃 堀木田原	繩文・弥生	46	車 田	〃 車 田	"
15	六 条 原	〃 六 条 原	弥生	47	前 木 場	上名前木場	"
16	城ヶ迫原	〃 城ヶ迫原	弥生	48	黒 羽 根	〃 黒羽根	"
17	道 駕	〃 道 駕	弥生	49	川 上	鹿 川 上	"
18	前木場 A	上名前木場	弥生	50	陣 之 尾	鹿上名陣之尾	"
19	前木場原	〃 前木場原	弥生	51	赤ヶ追古墳群	鹿寺ヶ追	古墳
20	白坂原	〃 白坂原	弥生	52	天神原遺跡	下名天神原	古墳 地下式横穴群
21	山 内 原	〃 山 内 原	弥生	53	池山古墳群	論 地 池 山	古墳
22	下 小 原	〃 下 小 原	弥生・土師	54	宮ノ上遺跡	宮ノ上吾平小学校	古墳 地下式横穴群
23	苦野原 A	〃 苦野原	繩文・弥生	55	千 寿 院	鹿千寿院	歴史
24	立 元	上名立元	繩文・弥生	56	含 穂 寺 跡	上名門 前	"
25	荷 挂 原	上名荷挂原	"	57	未 次 城	下名川東井神島	"
26	新地ノ上	上名新地上	"・弥生	58	簡追城(松下城)	上 名	"
27	鏡 原	〃 鏡 原	"	59	前木場 B	上名前木場	須恵器
28	資 振 原	西目川路資振原	"・弥生	60	赤野板碑	上名赤野	五輪塔
29	苦 原 野	上名苦原野	" "				
30	梅 の 下	鹿 梅 の 下	弥生				
31	堀 木 田	鹿 堀 木 田	"				
32	町 頭	〃 町 頭	"				

第6節 串良町の遺跡（第27図～第35図）

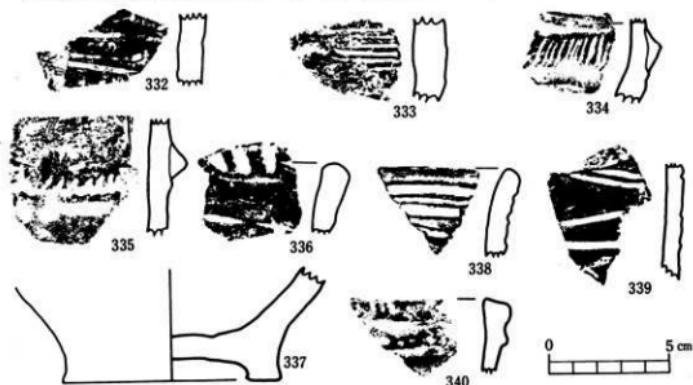
串良町は大隅半島の東南部のほぼ中央に位置し、東串良町、高山町、鹿屋市、大崎町と隣接している。地形は山地、台地、低地に大別されるが、大部分は台地で、いわゆる笠野原台地と呼ばれている。河川は肝付川とその支流の串良川があり、その流域に多くの遺跡が見られる。今までに縄文時代、弥生時代、古墳時代、中世山城等の存在が知られている。1～44は近年の調査により確認された遺跡、45～66は遺跡地名表より抜き出した遺跡である。

322は昭和52年に確認調査を行った上小牧遺跡出土の土器である。出土層はアカホヤ層の下層で乳白色粘質土層である。口縁部に刻目を有し、器面全体に貝殻条痕を施す円筒形土器である。縄文時代早期に位置するものと思われる。323、324は平野上遺跡（23）、323は壺形土器の底部、324は壺形土器の肩部で三角突帯を廻らす。いずれも弥生時代のものと思われる。325は牧原遺跡（22）、壺形土器の底部である。成川式（古墳時代）であろう。326、329、332～334は益畠遺跡（9）、326、329は高环の脚部で外面は丹塗りである。古墳時代のものと思われる。332は沈線文を施すもので縄文時代後期、333は貝殻条痕を施すもので、円筒土器と思われ、縄文時代早期、334はヘラによる連続した刻目を施すもので縄文時代後期と思われる。327は岡崎上遺跡（57）、高环の環部で外面は丹塗りである。古墳時代と思われる。328は是ヶ迫遺跡（6）、壺形土器の底部で若干あげ底の脚台である。弥生時代と思われる。330、331は村迫遺跡（33）、330は高环の脚部で、円形の透かしが認められる。331は須恵器で、外面は平行叩き文、内面は同心円叩き文が見られる。いずれも古墳時代と思われる。



第27図 串良町内の遺物

335～337は寶珠ヶ鼻遺跡(19), 335は連続刺突文と、凹線文を施す。336は口縁部に刻みをもち、沈線文を施す。337は底部で高台状を呈する。いずれも縄文時代後期と思われる。338, 339は富ヶ尾前遺跡(21)で沈線文を施すものである。縄文時代後期と思われる。340は神之間遺跡(35), 口縁部に二条の刻目突帯を有するもので、弥生時代前期と思われる。

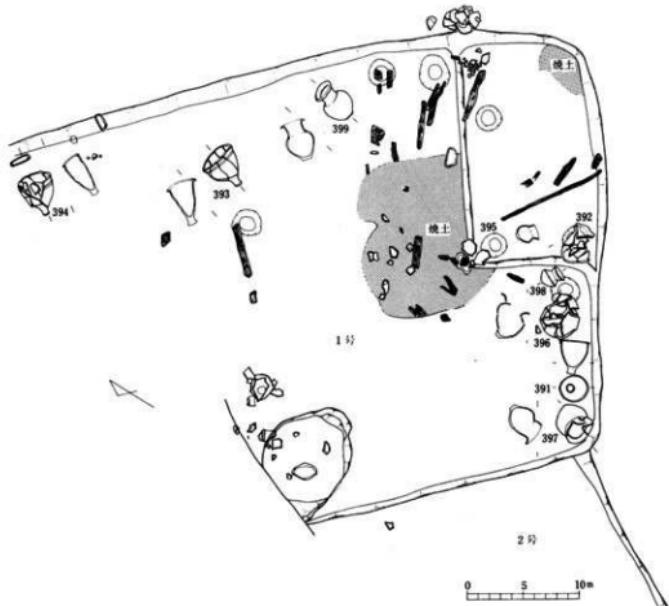


第28図 車良町内 の 遺 物

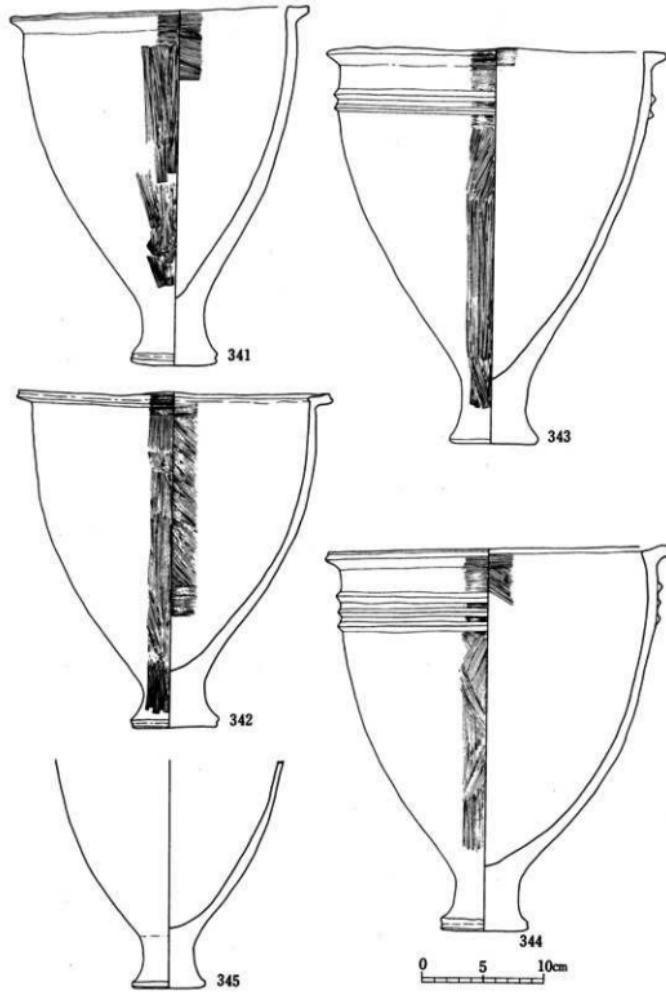
吉ヶ崎遺跡 (36, 第29図～第35図)

昭和52年に確認調査を行ない、弥生中期の住居址が検出された遺跡である。住居址は二基が重複して検出されたが、全体の形状は判明しない。一号住居址は、短辺3.5m、長辺5m以上の長方形プランが想定される。住居址の東隅に階段状の施設を持ち、ピットも八ヶ所認められる。この住居址の特徴は焼土が全面に見られ、炭火材が多く残る。また遺物も完全な状態で残り、二次的な火がかったような状態が観察された。おそらく火災により消失したものと思われる。遺物は床面に密着した状態で菱形土器4、壺形土器4、磨製石斧2、磨製石鎌3が検出され、覆土中よりも多数の土器片、磨製石斧1、磨製石鎌2、軽石製品1が出土した。341～349は床面上より出土した土器である。341～345は充実した脚台を有する菱形土器、341は口縁径25cm、器高25.3cmを測る。口縁部は短く、逆L字状に外反し端部はやや凹む。器面はハケ調整による。342は口縁径26cm、器高28cmを測る。口縁部は逆L字状に外反し端部はやや凹む。口縁内面には張り出しが認められる。内外面共にハケ調整による。343は口縁径28cm、器高33cmを測る。口縁部は逆L字状に外反する。胸部上位に二条の三角突帯を廻らす。内外共にハケ調整。344は口縁径28.4cm、器高31.6cmを測る。口縁部は逆L字状に外反し端部はわずかに凹む。胸部上位に三条の三角突帯を廻らす。ハケ調整。346～349は壺形土器、346は口縁径28.6cm、器高36.5cmを測る。平底の小さな底部で胴部は膨る。しまった頂部から口縁部へ大きく外反する。器面は

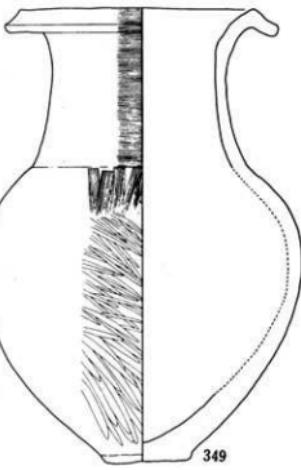
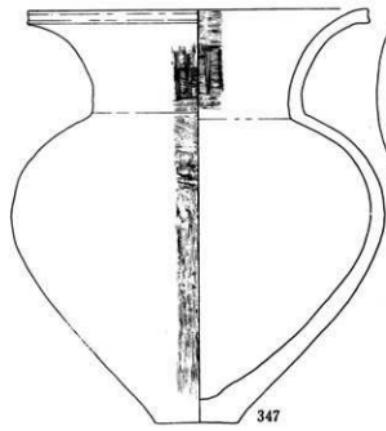
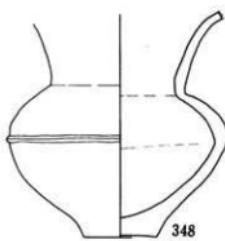
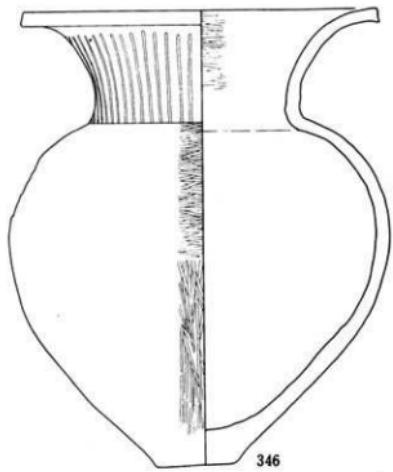
ヘラによるこまかい調整が施され、頸部から口縁部へかけてヘラによる暗文が施される。347は口縁径27.6cm、器高33.2cmを測る。器形は346とはほぼ同じである。器面はハケ調整。頸部から口縁部にかけてはハケによる横ナデ調整の後に、ハケによる縱方向の暗文が施される。348は口縁部を欠く小形の壺、底部は径6cmの平底で胴部は球形状に膨る。しまった頸部より大きく外反する。胴部最大径の位置に突帯を廻らす。349は口縁径22cm、器高36.5cmを測る。やや小さめの平底から長胴気味のあまり張らない胴部へと立上り、頸部はやや長い。口縁部は垂れ下り気味に外反する。肩部から頸部、口縁部にかけてはハケ調整。肩部から底部にかけてはナデ調整が施される。以上の341~349の土器は完成品で1号住居址の床面に密着した状態で出土し、セット関係をなすものと思われる。時期的には弥生時代中期中葉と考えられる。従来、弥生時代中期は山ノ口式土器としてとらえられて居り、これらも山ノ口式に含まれる。しかしながら、山ノ口式土器の時期の幅が広く、細分化が要求されている。その点で、341~349の土器は弥生時代中期中葉の一時期を画するものとしてとらえられ、重要な意味を持つものと考えられる。



第29図 吉ヶ崎遺跡、住居址平面図

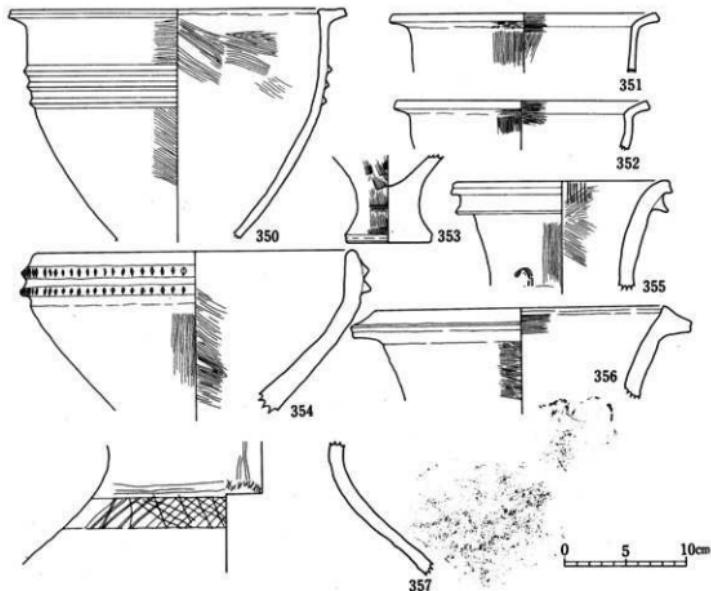


第30図 吉ヶ崎遺跡、1号住居址床面直下出土土器



0 5 10cm

第31図 吉ヶ崎遺跡1号住居址、床面直上出土土器

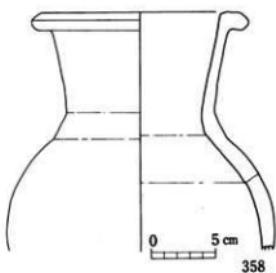


第32図 吉ヶ崎遺跡1号住居址出土遺物

350～357は1号住居址の覆土中より出土した土器である。

350～353は壺形土器、350は復元口縁径27.6cm、口縁部は逆L字状に外反し、胴部に三条の三角突帯を廻らす。351、352は復元口縁径が22cm、21cmを測るもので、口縁部はなだらかに外反するものである。353は底部で充実した脚台。354は鉢形土器、口縁径26cmを測る。口縁部が内湾するやや浅めの鉢である。口縁部に二条の刻目突帯を廻らす。355～357は壺形土器、355は口縁径18cmを測る。口縁部の外反は大きくない。口縁部下位に突帯を廻らし二叉状の口縁をなす。356は口縁径28cmを測る。口縁部はやや垂れ下り気味。

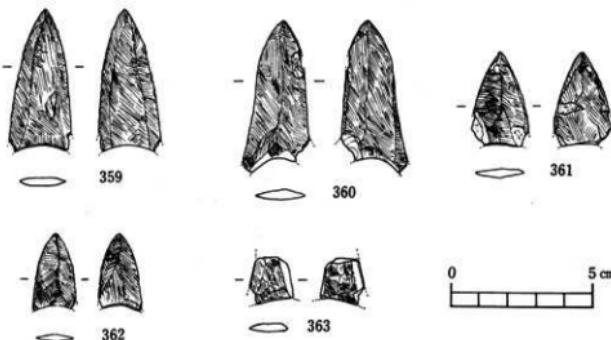
357は肩部および頸部に沈線による文様を施すものである。358は2号住居址に伴うものと思われる壺形土器、口縁径は17cmを測る。胴部の張りは少ない。頸部はやや長く直行気味で、口縁部は逆L字状に外反するものである。350～357・358はいずれも弥生中期中葉頃と思われる。



第33図 吉ヶ崎遺跡出土遺物

味に外反し、内面に張り出しを有する。357は肩部および頸部に沈線による文様を施すものである。358は2号住居址に伴うものと思われる壺形土器、口縁径は17cmを測る。胴部の張りは少ない。頸部はやや長く直行気味で、口縁部は逆L字状に外反するものである。350～357・358はいずれも弥生中期中葉頃と思われる。

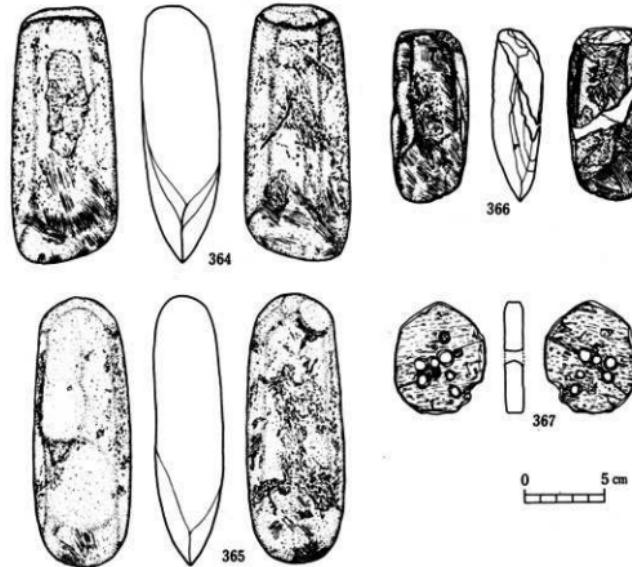
359から363は、扁平無基の凹基式の磨製石錐で、素材として粘板岩を用いている。359は最大長5.0cm、最大幅2.2cm、最大厚0.3cm、重さ3.8gを計り、基部両端が少々欠けているが、二等辺三角形状を呈している。両面ともに器面全体に研磨痕が顕著に観察され、製作時のものと思われる。両面ともに両側縁寄りには先端部から基部端部にかけて弱い棱を作り出している。360は、最大長5.3cm、最大幅2.3cm、最大厚0.4cm、重さ4.6gを計り、先端部及び基部端部、片側側縁の上位が少々欠けているが、二等辺三角形状を呈する。両面ともに器面全体に研磨痕が顕著に観察され、片面は基部付近と先端部から基部の中央を結ぶ線上付近に、片面は、さらに両側縁に明瞭な棱を作り出している。361は、最大長3.3cm、最大幅2.0cm、最大厚0.3cm、重さ2.3gを計り、先端部及び基部両端部とともに欠けているが、二等辺三角形状を呈する。両面ともに器面全体に研磨痕が顕著に見られ、整形上のためか、器面に多くの棱を作り出している。362は、最大長2.7cm、最大幅1.5cm、最大厚0.3cm、重さ1.1gを計り、先端部と基部両端部とともに欠けているが、二等辺三角形状を呈する。両面ともに器面全体に入念な研磨痕が観察され、両面ともに先端部から基部の中央を結ぶ線上付近に棱を作り出している。363は、磨製石錐の破片で、そのほとんどは破損しているが、基部と側縁の一部である。両面ともに研磨痕が観察される。



第34図 吉ヶ崎跡石器実測図(磨製石錐)

364～366は、磨製石斧で、364、365は、砂岩を素材に用いた蛤刃状の石斧で、366は、素材として粘板岩を用いている。364は、全長16.2cm、最大幅6.7cm、最大厚5.0cm、重さ850gを計り、頭部は、そのふくらみから平坦で胴部側縁との境が明瞭で、胴部は上半より下半の幅がやや大きい。器面全体に磨面が認められ、両面ともに刃部付近に擦痕が認められ、刃部は小さい刃こぼれが認められ、長年の使用のためか副刃を呈している。両面ともに基部部分と思われる所は、その一部が白く痕跡が認められる。365は、全長17.0cm、最大幅5.7cm、最大厚4.3cm、重さ930

g を計り、器面全体が入念に磨かれたあと、両側縁及び片面に敲打による痕跡が認められる。頭部はそのふくらみよりまるくふくらみ、胸部側辺との境は不明瞭で、胸部はほぼ平行である。両面ともに刃部付近に擦痕が認められ、刃部は円刃を呈し、一部刃こぼれも認められる。366は、全長10.9cm、最大幅4.9cm、最大厚3.0cm、重さ250gを計り、刃部は、両刃で扁刃を呈し、刃こぼれが認められる。器面全体とともに磨かれ明瞭な稜が認められ、本石斧は5つに分割され、その一部は出土が認められず、両面および側縁の一部は着色部分と思われる所に、敲打による痕跡が認められる。367は、全長7.1cm、最大幅5.7cm、最大厚1.2cmの軽石製の製品で、用途は不明である。両面より6ヶ所に穴が穿かれ、さらに片面より2ヶ所の穴が穿かれているが貫通していない。穴の径は0.4cmから1.0cmまでの大きさで、その位置については不規則である。二つに分割された状態で出土が認められている。



第35図 吉ヶ崎遺跡石器実測図(磨製石斧)・軽石製品実測図

番号	遺跡名	所在地	備考	番号	遺跡名	所在地	備考
1	牧山	細山田牧山	繩文・弥生	34	塚ノ下古墳	上小原塚ノ下	古墳
2	入部堀	〃入部堀	弥生	35	神ノ圓	上小原上ノ圓	弥生
3	町田堀	〃町田堀	繩文・弥生	36	吉ヶ崎	上小原吉ヶ崎	〃(住居址) 古墳
4	北原古墳	〃北原	古墳	37	上小牧	〃上小牧	弥生
5	新堀	〃新堀	繩文	38	上小牧古墳	〃上小牧	古墳
6	是ヶ迫	〃是ヶ迫	繩文・弥生	49	アマガ塚古墳	上小原久保	〃
7	川久保	〃川久保	弥生	40	供養塚古墳	〃平床	〃
8	小牧	上小原小牧	弥生・土師	41	城ヶ崎城	〃久保	中世
9	益畠	細山田益畠	繩文・弥生	42	松崎	〃	弥生
10	京の塚	細山田下中京塚	弥生・古墳	43	上別府	〃上別府	〃
11	石塚	有里石塚	〃	44	移ヶ迫	〃移木迫	〃
12	瓜々良蔵	〃永田堀	〃	45	ホンドンガマ	細山田下中	繩文・弥生
13	水田堀	〃永田堀	〃	46	立小野A	〃立小野	〃
14	桜場	〃桜場	繩文(石鐵) 弥生	47	立小野B	〃〃	弥生
15	熊ヶ鼻	〃熊ヶ鼻	〃	48	高松	〃高松	〃
16	宮留古墳	〃宮留	古墳	59	堂園	〃堂園	〃
17	柿木追古墳	〃柿木追	〃	50	生栗果	〃生栗果	〃
18	七反古墳	〃七反	〃	51	立小野	〃立小野	〃
19	寶珠ヶ鼻	〃寶珠ヶ鼻	繩文・弥生	52	アタゴ山	〃北原	〃
20	上大塚原	〃上塚原	古墳	53	錢亀岡	〃錢亀岡	〃
21	富ヶ尾前	〃富ヶ尾	弥生・土師	54	栄田	上小原栄田	〃
22	牧原	〃牧原	〃古墳	55	堅田	〃岡崎立田	〃
23	平野上	下小原平野上	〃	56	大塚原	〃有里大塚原	〃
24	古棚	岡崎古棚	〃	57	岡崎の上	〃岡崎の上	〃
25	上ノ馬場	〃〃	土師	58	宮の下	〃宮ノ下	〃
26	小塚	〃小塚	古墳・ 地下式横穴	69	上小原古墳	上小原下方銀田の上	古墳群
27	古園	〃古園	繩文・弥生	60	大塚原古墳	有里大塚原	〃
28	白塚水上	下小原白塚水上	弥生	61	岡崎古墳	〃岡崎	〃
29	白塚水古墳	下小原白塚水	古墳	62	北田ノ上古墳	〃北田ノ上	〃
30	白苔水	〃〃	弥生	63	フゾ山	下小原白塚水	地下式横穴
31	鍋池ノ上	〃鍋池ノ上	〃	64	北原城跡	細山田生栗果	城跡
32	後藤追	〃後藤追	〃	65	鶴亀城本丸跡	岡崎	(指定文化財)
33	村追	〃村追	〃	66	北頭館飯屋跡	〃	〃

第7節 高山町の遺跡・遺物（第36図～第40図）

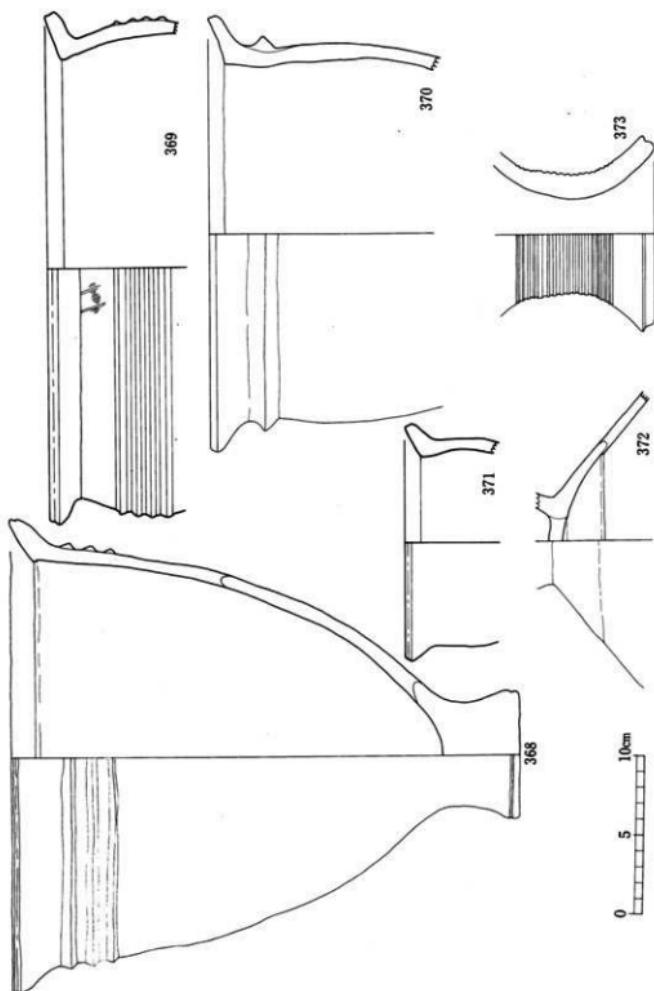
高山町は大隅半島のはば中央部に位置し、一部は志布志湾に面している。鹿屋市、吾平町、串良町、東串良町、内ノ浦町と隣接する。南側に標高800～900mの国見山系が控え、山地の裾が舌状台地状にのびてくる。又、肝属川の本流、支流が流れ込み、肥沃な沖積平野が広がり穀倉地帯となる。本町は古くから古墳をはじめとする文化財の調査等が行なわれており、国指定の塚崎古墳群等が知られている。また、花车礼遺跡で県内最初の弥生時代の住居址が発見されるなど多くの遺跡が知られる。1～14は近年の調査により確認された遺跡、15～90は遺跡地名表より抜き出した遺跡である。

塚崎遺跡（44, 45, 53, 第36図～第38図）

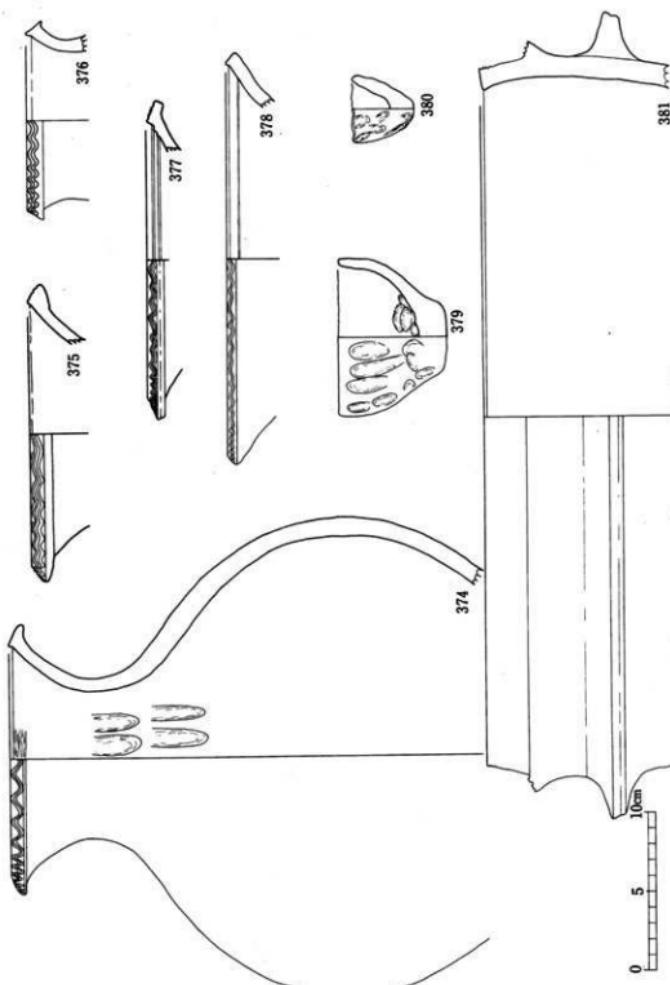
塚崎遺跡は塚崎台地の中に、原遺跡（45）、堀込遺跡（44）、塚崎遺跡（53）等が存在するが、これらをまとめて塚崎遺跡とした。塚崎台地にはこの他に国指定史跡の塚崎古墳群があり前方後円墳4基、円墳40基、地下式横穴式墓が知られている。

第36図～第38図は、昭和52年、54年に確認調査を行なったものである。368～371は壺形土器、368は口縁径30cm、器高32cmを測る。底部を充実した脚台で胴部はわずかに張る。口縁部は「く」の字状に外反し内面はわずかに張り出す。胴部上位に三条の三角形貼付突帯を廻らす。底部附近、及び胴部中位に接合部の痕跡が認められる。369は口縁径32.5cmを測る。胴部は膨み口縁部は「く」の字状に近く外反する。胴部上位に四条の三角形貼付突帯を廻らす。370は口縁径27.5cmを測る。口縁部は「く」の字状に近く外反し、胴部はあまり張らない。口縁部下位に一条の三角形貼付突帯を廻らす。371は口縁径15cmを測る。口縁部は「く」の字状に外反し、突帯は有しない。372は蓋と思われる。378は器台、18条の沈線を廻らす。374～378、382～388は壺形土器で、口縁部に櫛描波状文を施したものである。374は口縁径17cmを測る。胴部は球形状に膨む。頭部はしまり、口縁部へと外反する。口縁部は短く、垂れ下り気味に外反する。382は口縁径21.5cmを測る。しまった頭部より口縁部へ直行気味に立ちあがり、口縁部は垂れ下り気味に外反するものである。377は口縁内面に二条の突起を廻らす。375、376、378、383～388は口縁部が肥厚しており、櫛描波状文は口唇部に施されているかに見える。379は壺形土器、口縁径10cm、器高6.8cmを測る。口縁部がわずかに内湾し、器壁内外面には指による調整痕が認められる。380は手捏土器、口縁径4.3cm、器高3.9cmを測る。器壁に指による調整痕が認められる。381は大型壺、口縁部は欠損するか推定径52cmと思われる。口縁下位に突帯を廻らす。389は口縁径12cmの壺形土器、胴部はあまり張らず、口縁部が頭部のしまった部位よりすぐに「く」の字状に外反するものである。肩部に二条の三角形貼付突帯を廻らす。390は口縁径42cmを測る大型壺、胴部はあまり張らず、口縁部及び口縁下位の突帯は同じように「く」の字状に外反する。391は口縁径11.8cmの壺形土器、392は口縁径16.2cm、器高5.4cmのやや浅めの壺形土器、393は壺形土器の口縁部と思われる。394は鉢形土器か壺形土器の底部と思われる。395、396は高环の脚部である。368～390は弥生時代中期中葉より後半にかけてのもの、391～396は古墳時代のものと思われる。

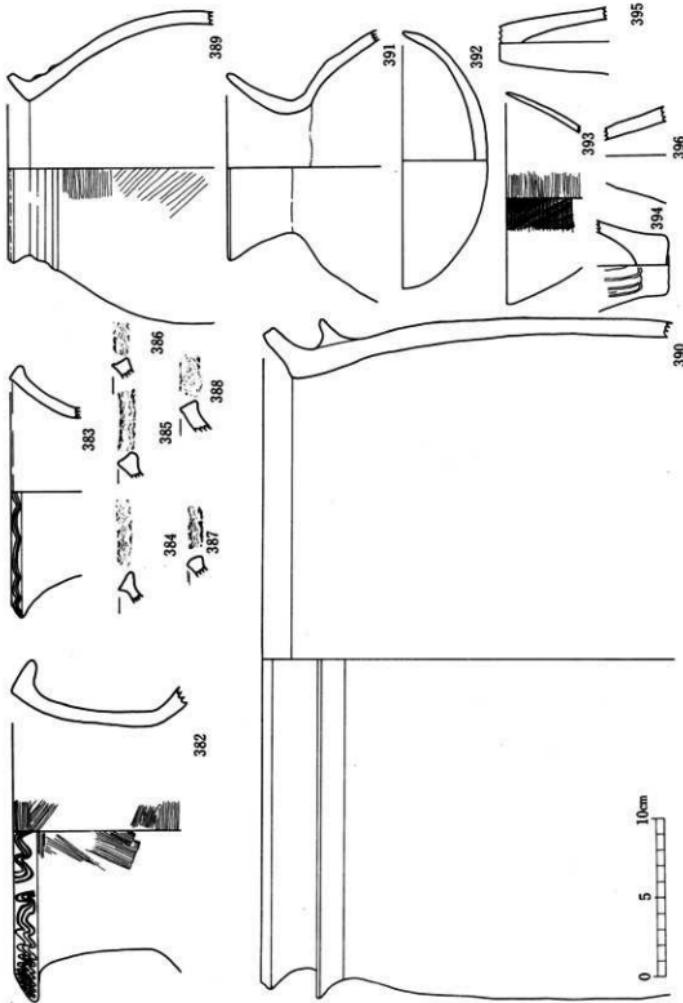
第36図 墓崎遺跡出土遺物



第37圖 塚崎遺跡出土遺物

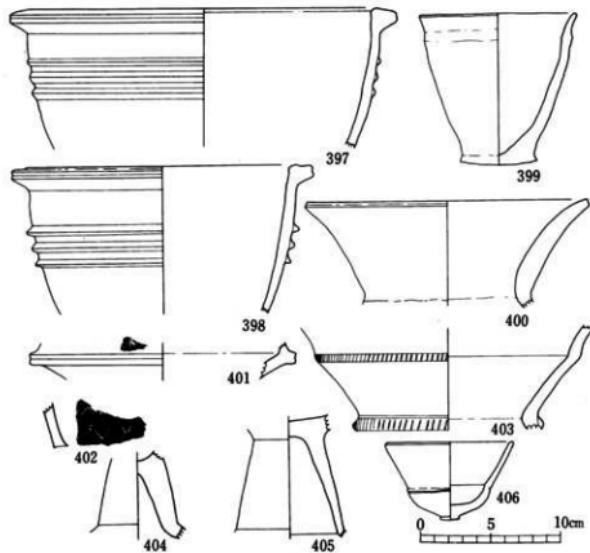


第36圖 煤 塵 遺 跡 出 土 遺 物



上原遺跡（89、第39図）

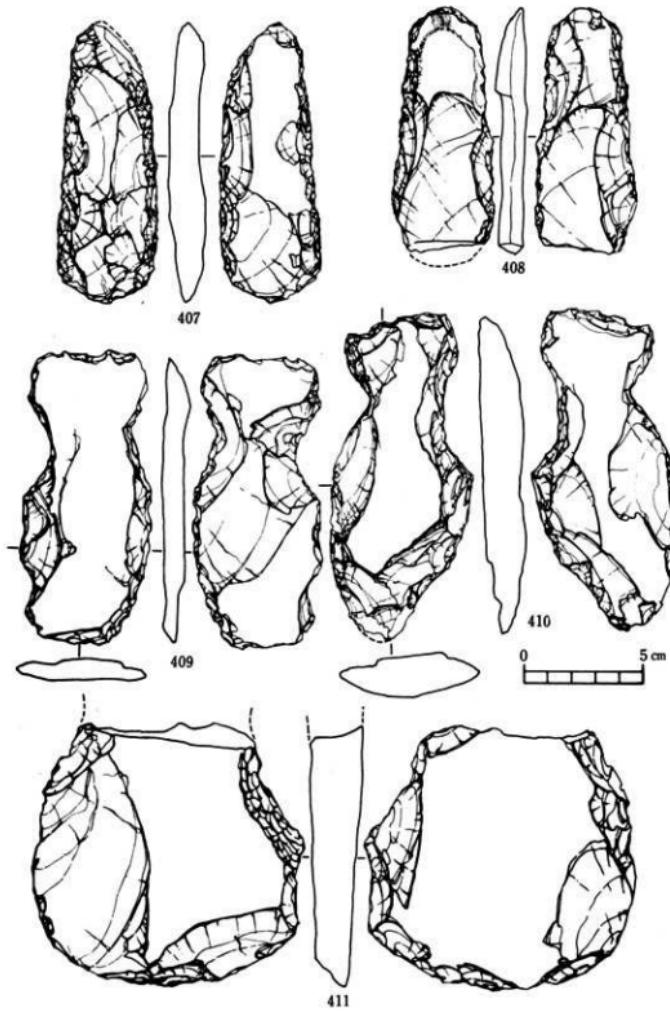
上原遺跡は昭和52年に確認調査を行ったもので、住居址らしい遺構が認められた。397、398は口縁部が逆L字状に外反し、胴部に三条の三角形貼付突帯を廻らすものである。399は口縁径11.2cm、器高5.5cmを測る小形の鉢形土器である。400は壺形土器の口縁部、401、402は袋状の口縁を呈する壺形土器で、口縁外面に横描波文状を施すものである。403は袋状を呈する口縁部で、頭部の突帯及び口縁下位に刻目を施す。404、405は高杯の脚部である。406は口縁径9.1cm器高5.6cmを測る壺形土器、底部に径1.4cm、厚さ0.3cmの突起を有する。397、398は弥生時代中期中葉、399～406は古墳時代のものと思われる。



第39図 上原遺跡出土遺物

下永山遺跡（7、第40図）

407～411は下永山遺跡より表面採集された石器である。いずれも扁平な打製石器である。407、408は短冊状、409、410は抉りを有するもので、いわゆる有肩石斧と呼ばれるもの、411は一部を欠くが、やや大きめの石器である。下永山遺跡では、弥生式土器片等が認められているが、この資料は表面採集品のため時期は不明である。



第40図 下永山遺跡採集石器

番号	遺跡名	所在地	備考	番号	遺跡名	所在地	備考
1	東泊	有明東泊	タタラ跡 (江戸)	34	今市牧	富山今市牧	弥生
2	乙子神社境内	" 乙子	繩文	35	前烟	" 前烟	"
3	仮屋	" 仮屋	"	36	大塚原	" 大塚原	"
4	床滑A	" 床滑	" · 弥生	37	瀬戸宇治原	後田瀬戸宇治原	"
5	床滑B	" 床滑	"	38	中原	後田中原	"
6	大戸原	新富大戸原	弥生·古墳	39	内園	前田三反内園	"
7	下永山	新富永山	" "	40	下住	前田下住	"
8	中村園	" 中村園	"	41	東横間	新富東横間	" · 古墳
9	長珠庵	" 長珠庵	土師	42	大窪	後田大窪	"
10	川路	" 川路	弥生·土師	43	鳥越	" 鳥越	" · 土師
11	山下	後田山下	" "	44	堀込	野崎堀崎堀込	" · 土師
12	錢龟	" 錢龜	"	45	原	野崎堀崎原	" · 古墳
13	小车田上	" 小车田上	" · 土師	46	上ノ原	前田上ノ原	" · 古墳
14	輪荷岡	" 輪荷岡	"	47	堂園の上	前田堂園の上	"
15	長谷	波見荒瀬長谷	繩文 弥生·土師	48	岩屋	川上岩屋	"
16	山下ノ上	後田山下ノ上	繩文	49	湯の谷	" 湯の谷	"
17	瀬戸宇治A	" 瀬戸宇治	"	50	瀬戸口原	後田白坂瀬戸口原	" · 古墳
18	道中原	" 道中原	" · 弥生 土師	51	永野原	後田永野原	" · 土師
19	片野	" 川上片野	繩文·弥生	52	論地原	" 論地原	"
20	折生野	" 川上折生野	"	53	堺崎	野崎堀原	" · 古墳
21	奥野	" 岩屋奥野	"	54	津曲	" 津曲	"
22	花车礼	新富花车礼	弥生	55	横溝	野崎和田横溝	"
23	上永山	" 上永山	"	56	和田城	野崎和田城	" · 土師
24	芋追	新富花车礼芋追	" · 土師	57	瀬戸宇治B	後田瀬戸宇治	繩文·弥生
25	上西方	前田上西方	" · 古墳	58	安野	野崎安野	弥生
26	訪諱ノ上	前田上西方訪諱ノ上	" · 土師	59	西大園	" 西大園	"
27	寺ノ上	" 寺ノ上	" "	60	平後園	波見平後園	" · 須恵
28	軍原	前田上大脇軍原	" · 古墳	61	松山	" 荒瀬松山	" · 土師
29	淹ノ上	" 淹ノ上	" · 土師	62	波見公園	" 公園裏	"
30	本城入口	" 本城入口	"	63	稻村高塚	後田稻村高塚	"
31	船着	" 川上船着	"	64	上ノ原遺跡	前田上ノ原	弥生 地下式横穴
32	安田	" 本城安田	"	65	横間遺跡	新富横間道路下	"
33	天神原	宮下天神原	" · 古墳	66	白坂	後田白坂	"

番号	遺跡名	所在地	備考
67	前田下西	前田下西方	弥生式横穴
68	前田西町 西宮神社	前田西町西宮神社	"
69	今市	富山今市	古墳
70	辺塚古墳群	" 辺塚	古墳群
71	宮ノ上 "	宮下宮ノ上	古墳群
72	イヤの前 "	宮下イヤの前	古墳
73	辻 "	富山辻	古墳群
74	西横間	新富横間	"
75	九岡古墳	新富米山寺墓地	"
76	北後田古墳	後田稻村	"
77	塙崎古墳	野崎塙込	"
78	竹田神社	前田上西方日新	

番号	遺跡名	所在地	備考
79	盛光寺墓地	前田上西方日新	
80	薬師寺跨	富山辻	
81	道隆寺跨	本城	
82	盛光寺跨	前田上西方	
83	高山城跨	新富本城	
84	和田城跨	野崎和田	
85	検見崎城跨	後田検見崎	
86	弓張城跨	新富城山	
87	富山城跨	富山	
88	検見崎古墳	後田検見崎	古墳
89	上厚	野崎上厚	弥生・古墳
90	本城磨崖仏	本城	

註 6) 戸崎勝洋・立神次郎「小山遺跡」『鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書』鹿児島県教育委員会
1982年

- 7) 河口直徳「山ノ口遺跡」『鹿児島県文化財調査報告書第7集』、鹿児島県教育委員会、1960年。
河口直徳「山ノ口遺跡」『立正考古第21号』、立正大学考古学研究会、1962年。
- 8) 松本健郎・横尾泰宏・勢田広行「生産道路基本調査報告書II」「熊本県文化財調査報告第48集」、熊本県教育委員会、1980年。
- 9) 立神次郎・中村耕治「大隅地区埋蔵文化財分布調査概報」「鹿児島県埋蔵文化財調査報告書13」、鹿児島県教育委員会、1980年。
- 10) 長野真一・峯崎幸清「大隅地区埋蔵文化財分布調査概報」「鹿児島県埋蔵文化財調査報告書23」、鹿児島県教育委員会、1982年。
- 13) 般盛山古墳は、昭和10年頃に瀬戸口望によって、その存在が知られていた。その後、墳丘上に町営の国民宿舎タグリ荘が建設され、墳丘は破壊されている。主体部が宿舎の玄関近くとされている。

志布志町内の遺跡・遺物

志布志町は曾於郡の東南部に位置し、北東から東にかけて宮崎県の都城市、串間市と県境をなしている。また、末吉町、松山町、有明町と隣接する。北部は標高200m以上の山地がありそこから、前川・安樂川・大矢取川が流れ出て多くの浸食谷を形成する。山地の南側には独立した火山灰台地が広がり、縄文時代の遺跡も数多く存在する。志布志町においては、縄文時代を中心にして多くの遺跡が知られている。これらの多くの遺跡は、瀬戸口望の長年の研究によって発見され、今回の調査でも基礎資料として活かされている。古墳時代においても県内で最も古いものとされている飯盛山古墳^(注1)も所存している。1~71は近年の調査により知られた遺跡、72~178は遺跡地名表より抜き出した遺跡である。

番号	遺跡名	所在地	備考	番号	遺跡名	所在地	備考
1	牧原	田之浦牧原	縄文(轟)	25	下原B	内之倉下原	弥生・縄文
2	内門	"内門	縄文	26	長尾	"長尾・横尾・梅野	縄文
3	白木原	"白木原	縄文(押型文)	27	横尾A	"横尾	縄文
4	大長野	"大長野	縄文(押型文)	28	横尾B	"横尾	縄文
5	平山	"平山	弥生	29	札建	"札建	弥生
6	宮谷口	"宮谷口	縄文	30	蓑輪	"蓑輪・札建	縄文・弥生
7	宮ヶ中	"宮ヶ中	弥生	31	柳	安楽・人足・柳	弥生・縄文
8	本村	"本村	縄文	32	上重	"上重	縄文
9	下原	"下原	弥生	33	四反田	"四反田	弥生
10	小牧	"小牧	縄文	34	高牧	"高牧	弥生
11	藏園	"藏園	縄文(住居址)	35	二重堀	"二重堀	弥生
12	中迫	"中迫	縄文	36	権現原	"権現原	弥生
13	東黒土田	内ノ倉東黒土田	縄文	37	別府	"別府	縄文
14	土光A	"土光	縄文	38	水ヶ迫	"水ヶ迫	弥生・土師
15	土光B	"土光	縄文	39	大西	志布志大西	縄文
16	上原	"上原	縄文	40	向川原帖	向川原	縄文
17	中須	"中須	縄文	41	野首A	"内城・野首	弥生・縄文
18	森山	"森山	弥生	42	野首B	"西中尾・野首	縄文
19	西中烟	"西中烟	縄文	43	西中尾	"西中尾	縄文
20	平原A	"平原・西烟	弥生	44	油田	"油田・飛渡	弥生・縄文
21	平原B	"平原・上原	弥生	45	堂追	"堂追	弥生・縄文
22	上原	"上原	弥生	46	島廻	"島廻	弥生
23	樽野	"樽野	弥生・縄文	47	下牧	"下牧	弥生・縄文
24	下原A	"下原	縄文	48	白木车田	"白木车田	弥生・縄文

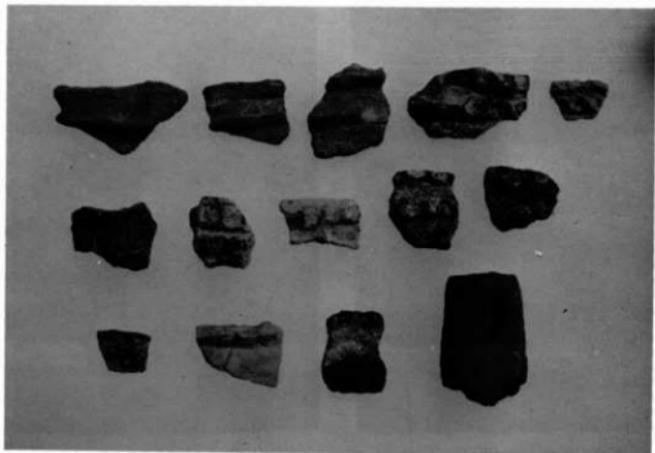
番号	道跡名	所在地	備考
49	上 牧	帖 上 牧	繩文
50	中 原	帖 中 原	繩文
51	井 手 元	帖井手元・中原	繩文
52	上 佐 野 原	帖上佐原原	弥生
53	出 口	帖出ノ口	繩文
54	東 原	帖 東 原	繩文
55	堂 ノ 下	帖堂ノ下	繩文
56	家 野	帖 家 野	繩文
57	松 崎	帖松崎家野	繩文
58	西 原	帖西原・二反野	繩文
59	牧	帖 牧	弥生・繩文
60	川 平	帖 川 平	繩文
61	下 追	帖下追・中追	繩文
62	下 佐 野 原	帖下佐野原	繩文
63	大 二 反 野	帖大二反野・二反野	弥生・繩文
64	下 田	帖 下 田	繩文
65	八 反 田	帖 八 反 田	繩文
66	柳 元	帖 柳 元	繩文・弥生
67	下 原	帖 下 原	弥生
68	前 谷	帖 前 原	繩文
69	柳 ノ 下	帖柳ノ下	繩文
70	山 下	帖 山 下	弥生
71	深 追	夏井深追・土光・西俣	弥生・繩文
72	上 門 A	安樂 上 門	繩文・弥生
73	上 門 B	" "	繩文
74	上 門 C	" "	繩文
75	上 門 D	" "	繩文
76	大 追	" 大 追	繩文・弥生
77	石 踊	帖 石 踊	繩文・弥生
78	野 首	帖 野 首	繩文・弥生
79	柳 井 谷	帖柳井谷	繩文
80	道 重	内之倉弓場追2280	繩文
81			

番号	道跡名	所在地	備考
82	ミゾレ谷	夏井ミゾレ谷	繩文
83	下 牧	帖 下 牧	繩文・弥生
84	ウドン上	帖ウドン上	繩文
85	吉 原	田之浦吉原	繩文
86	牧 野	田之浦牧野	繩文・弥生
87	出 口	内之倉出口	繩文・弥生
88	立 花 追	内之倉立花追	繩文
89	田 床	内之倉潤野田床	繩文
90	大 川 内	内之倉大川内	繩文
91	天 提	帖松崎 10767 10290	繩文・弥生
92	横 峰	帖 横 峰	繩文・弥生
93	片 野 洞 穴	内之倉片野	繩文・弥生
94	後 谷	内之倉後谷	繩文・弥生
95	山 ノ 上	帖 別府 8473	繩文
96	小 潤	帖 小 潤 6423	繩文・弥生
97	倉 野	田之浦吉原1171	繩文
98	板 山	田之浦板山 116	繩文
99	白 木 八 重	田之浦白木八重1039	繩文
100	大 越	田之浦宮地原348	繩文・弥生
101	小 牧	田之浦小牧122	繩文
102	小 追	田之浦 小 追	繩文・弥生
103	山 久 保 B	田之浦山久保	繩文
104	宮 前	内之倉竹下6661-5	繩文・弥生
105	姥ヶ谷	内之倉姥ヶ谷5546	繩文・弥生
106	東 黒 土 田 A	内之倉黒土田	繩文
107	東 黑 土 田 B	内之倉黒土田	繩文
108	東 黑 土 田 C	内之倉黒土田	繩文・弥生
109	井 手 平	内之倉井手平	繩文
110	池 野	内之倉池野	繩文
111	倉 園 A	内之倉池野	繩文
112	倉 園 B	内之倉池野	繩文
113	十 文 字	内之倉 十文字原4081	繩文
114	浜 場	内之倉片野	繩文

番号	遺跡名	所在地	備考	番号	遺跡名	所在地	備考
115	出水	内之倉前畠2928	縄文	148	佐野	帖 帖 野	弥生
116	平原	内之倉平原	縄文	149	上田屋敷	帖 上田屋敷	弥生
117	山裾	内之倉山裾	縄文	150	外ノ牧A	帖 外ノ牧	弥生
118	今別府	内之倉今別府	縄文	151	打出ヶ浜	夏井打出ヶ浜	弥生
119	上博野	内之倉上博野	縄文	152	平城	安樂 平城	弥生
120	橋之口	内之倉橋之口 ⁴⁶⁰	縄文	153	一丁田	安樂 一丁田	須恵・土師器
121	橋之口	内之倉橋野717		154	六月坂土坂	安樂 六月坂	横穴墓
122	鎌石橋	帖 鎌石	縄文	155	山宮土坂	安樂 宮馬場	歴史
123	鎌石	〃	縄文・弥生	156	夏井古墳	夏井堀之内	古墳
124	二反野	帖 二反野	縄文・弥生	157	飯盛山古墳	夏井タグリ岬	古墳
125	坂之上	帖 坂之上	縄文	158	批拂島	夏井批拂島	須恵器 土師器
126	野首橋	帖 大性院	縄文	159	桜山	安樂 桜山	土師器
127	夏井浜	夏井地蔵下	縄文	160	市坂	帖 市坂	須恵器
128	上ノ園	夏井上ノ園	縄文	161	額娃郷	安樂 額娃郷	須恵器 土師器
129	曲瀬	安樂中原	縄文・弥生	162	向江	安樂 向江	土師器
130	小瀬A	安樂小瀬4084	縄文	163	外ノ牧B	帖 外ノ牧	土師器
131	中原	安樂中原4712-6	縄文	164	和田	内之倉和田	弥生
132	小瀬B	安樂小瀬	縄文	165	昆砂ヶ野	内之倉昆砂ヶ野	弥生
133	百堂穴	安樂岩戸	縄文・弥生	166	山宮神社	安樂 宮馬場	
134	宮脇	安樂宮脇1106-1	縄文・弥生	167	宝満寺址	帖 向川原	
135	安良	安樂安良	縄文・弥生	168	耶山院跡	帖 上大黒	
136	鳥井下	安樂鳥井下	縄文	169	松尾城跡	帖	
137	船磯	安樂船磯	縄文	170	志布志城跡		
138	前之段	帖 前之段	縄文	171	安樂城跡		
139	八郎ヶ野B	内之倉八郎一野	縄文・弥生	172	高城跡		
140	毛穴野	帖 毛穴野	弥生	173	大慈寺墓地	帖 大黒町	
141	六月坂	帖 六月坂	弥生・須恵器 土師器	174	愛甲善春墓	帖 小西	
142	宮馬場	安樂宮馬場	弥生	175	肝付兼墓		
143	水ヶ追	安樂水ヶ追	弥生	176	山久保A	田ノ浦山久保	縄文
144	道悦	安樂道悦	弥生	177	八郎ヶ野A	内ノ倉八郎ヶ野	縄文
145	田吹野	田之浦田吹野	弥生				
146	夏井	夏井外牧	弥生				
147	高吉	安樂高吉	弥生				



① 笑喜遺跡（骨壺）



② 大泊貝塚（II・III・IV類）



V層出土土器



IV層出土土器



V層中檢出集石

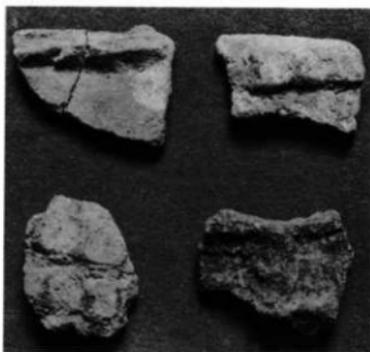


IV層中檢出集石

鹿 廓 市 伊 敦 造 跡



V層検出集石及び土器

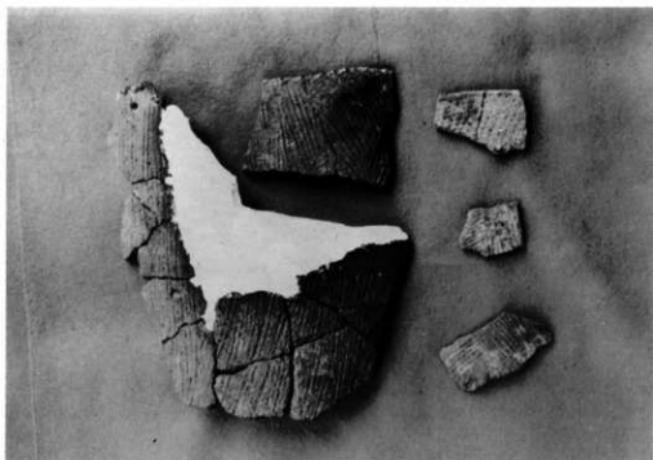


Ⅷ層出土石器



Ⅷ層出土土器

鹿屋市伊敷遺跡



①串良町上小牧遺跡出土土器



②高山町塚崎遺跡出土土器